

## 特集1

都留フィールド・ミュージアムの到達を  
確認し第二ステージを見通す

## 特集2

都留フィールド・ミュージアムの  
歴史と思想をさぐる



題字 黒部行子  
絵 成瀬洋平 (本学卒業生)

### 都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

コンコーディア大学（カナダ・モンクトリオール）の学生マリオン・ピン（Marion Pynn）は、

E・T・シートンが21歳の誕生日に、父から養育費を返すよう告げられ、数年かけて返済した事実とシートンの自然観との関連を論じました（Ernest Thompson Seton : Wilderness Debs, 2009）。彼女は、返済によってシートンがあらゆる面から解放され、生涯をとおして自然の法則（自然への恩義を含む）に忠実に生きる考えをつらぬいた、としています。

わたしは最近、上野公園のベンチで休む人に近づくスズメを見ました。スズメは人にサインをおくり、サインを解する人から食物を受け取りました。わたしはスズメの利発さに驚き、スズメとの交流を楽しむ人に共感しました。

しかし、公園当局は鳥に食物を与えることを「生態系を乱す」として禁じています。でも、シートンの「自然への恩義（負債の意味も含めて）」の考えによるなら、スズメを大量に焼き鳥にして食べた日本人がスズメに食物を与える行為には一理あります。現在の生態系をこえて、歴史的な経緯も含むこれからの生態系を想定すべきです。

わたしは、動物とは他の生きものを食べて生きる生きものであり、食物の獲得にもっともよく才能を発揮する、とみます。つまり食物の獲得を間近に見ることは、動物を理解する最高の道です。わたしは公園で鳥に食物を与える人と同等の親しい関係を、リスとの間に「自然の負債をかえす」という形でつくりたくないか、試み

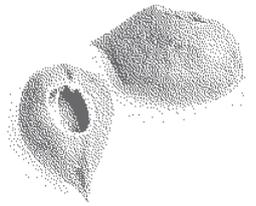
ました。

まずリスとの出会いの場所ですが、わたしは山小屋の部屋にいて、窓のむこうにリスにやってくるのを待たせ、と決めました。窓の前の二本のスギの木に棒をわたし（横木と呼びます）、横木にクルミの実を3個おきました（今年の2月）。三週間ほどして、横木のクルミが消えました（リスはクルミをみつけた場所を翌朝再びおとずれます）。わたしはリスが横木でクルミをとる場面を毎日一度はみることにしました。

つまり窓辺で日に一度リスと顔をあわせる、その小さな出会いのつみかさねが、リスと親しい関係をつくるわたしの方法です。ここでは、その成り行きの全体は書けないので、リスとの出会いの初期と今をお伝えします。

初めリスは「スケールの大きな用心深さ」で、横木の上のクルミをとりにきました。森の奥50メートルの大木をのぼり、高さ25メートルの樹冠部の枝から枝をつたって木を渡り、窓の前のスギにきました。そして幹のむこう側をおりて、横木に姿をあらわしたのです。クルミをくわえりと跳んで幹にもどり、幹の向こう側に消えました。リスは樹冠部の枝の道をもどり、奥の大木でクルミを割って食べました。

動物に日々食物を与えていると、それは「餌付け」であると動物学者はいいいます。でも、以上のリスの行動は「餌付け」という言葉はもつと慎重に使うべき、といっています。「餌付け」とは「食物にならず」という意味でしょう。しかしリスは、初めからクルミの実にひかれまし



■今泉 吉晴

# クルミの実をかえす



リス道走る



窓の前の横木

た。またリスは、クルミのありかを一回で学習しました。そして、窓辺のわたしの注意をひかないように、樹冠部をわたるコースを創案しました。それは森で育ったリスのコモン・センス（人を含む自然に適切に対応するセンス）によっています。

そして、八ヶ月が経過した今（11月）、7〜9匹のリスが「リスの道」をつたって、横木にやってきました。「リスの道」とは、わたしが森の奥と横木を歩き来できるよう、木の枝や棒を高さ2メートルほどの杭に横にかけて、紐でしばってつないだ高架の道です。わたしはまた、「リスの道」を山小屋のまわりを一周できるようにつくり、25メートル先の庭に生えるクルミの木にのびました。

わたしへの姿勢も変わりました。はじめのうちリスは、わたしが部屋で動くと木の幹の見えない側にまわりました（リスは木の幹という90度の絶壁を安全地帯にして、天敵の攻撃をさけます）。けれど、5月には、わたしの動きを気にしなくなりました。ただし、食事をしている時は、見られると場所をかえます。つまり、無数の出会いで学習をかさね、コモン・センスに磨きをかけました。

今もわたしは小屋の外にでると、リスからキョキョーという鋭い警戒声をあげせかけられます。リスとの親しい関係は外では通用しません。リスの人への警戒心を損なわなかったことは、全身を見せない窓をかけた交流の成果、とわたしは考えていますが、リスもまた窓辺と

いう場所を限定した（その場だけに適用する）厳密な学習をした、ということでしょう。

秋はリスの収穫祭です。「リスの道」を通ってリスが山小屋の窓辺をへて、庭のクルミの木に向かいました。その中で、わたしは二匹のペアーを見分けていました。

二匹の違いは、力の違いにもっともよくあらわれしました。一匹は大きく、クルミを6個一度に運びました。もう一匹は小さく、運べるクルミは4個までで、それもやつともちあげて運び、しばしば落としました（クルミは緑の果皮ごとで一個30グラム程度です）。大きな一匹はクルミの木をまもって、小さなリスをのぞく他のリスを追いはらいました。でも、やってくるリスが多くなると、いっしょに食事をしました。つまり、仲間とのつきあいでもリスはよくコモン・センス（シートンのいう自然の法則に適切に応じるセンス）を働かせました。

わたしがリスに提供したクルミの実は、野生のクルミの実です。それをわたしはリスに提供して自然にかえしました。ひきかえにリスから多くを学びました。もっともうれしい成果は、山小屋の庭に生えてきている木々を、リスと相談しながら、リスのすみ場所にかなう森に育てる、という新しい目標をもてたことです。

（いまいずみ よしはる・本学名誉教授、

本学地域交流研究センター初代センター長

# リスに



4個のクルミを運ぶリス



小屋から庭のクルミの木にのびるリス道



# 都留フィールド・ミュージアムの 到達を確認し 第二ステージを見通す

◆観察と  
ピオトープづくり

地域交流研究センターは2003年4月に誕生しましたが、その出発にあたり、フィールド・ミュージアム部門では、3年計画を3回重ねる、9年ほどの見通しをもつ「研究計画書」を作成しています（その輪郭は本通信1号で知ることができます）。来年度は、その「完成年度」にあたりますので、本号では都留フィールド・ミュージアムの到達を確認し、課題を見通していく特集を組むことにしました。

本年度はとくに、ムリネモ（ムササビ、リス、ネズミ、モグラ）とのエンカウンタースペースづくりなどが前進しましたが、たとえばリス（8頁）については、「研究計画書」では「自然科学棟、および2号館からリスの観察が可能となるよう、クルミやハシバミを実生から育てる。これらの植物を自然科学棟、2号館東側の林縁部に配置し、手入れをしながらリスが訪れる環境を整える。」と詳細に記されています。中屋敷フィールドは充実した歴史をもってきました（10、11頁）。「研究計画書」の「地域の人々、団体との協力体制」ということでは、予想を超えた取組みが生まれています（18、19頁）。この「研究計画書」には記されていないことですが、谷村第一小学校との交流が生まれています（12、

13頁）。「夏休み親子自然教室」も行なわれるようになっていきます（15頁）。『フィールド・ノート』刊行の事業は、大学教育実践の一つの「発見」というべき大きな意味をもってきています（14頁）。市の社会教育との交流も開かれてきています（16、17頁）。17号でお伝えした「大哺乳類展」（上野・国立科学博物館）は、大学としても総力をあげて関わる記念すべきものとなりました（20、21頁）。（編集部）

## うら山観察会へようこそ

■近 知夏

私たちがうら山観察会（\*）は、子どもたちを対象に都留市内で自然観察会を行っています。うぐいすホールの裏山である大桑山が私たちの主なフィールドです。他にも、ムササビの観察会では鹿留の今宮神社に、ホタルの観察会では小形山地区にも行きます。1年に8回ある観察会では、都留の自然の季節感が感じられ、都留にすむさまざまな野生の生き物たちに出会えます。

4月にあるムササビの観察会では、鹿留の今宮神社で滑空するムササビを見ることが出来ます。同じく4月には、大桑山で春のうら山たんけんもありま。春の草花やカエルの卵など、春に見られる生き物から、うら山の春を感じることが出来ます。

5月にある初夏のうら山たんけんでは、顔を出し始めた夏の草花やオトシブミなど、夏に見られる生き物によって、春から夏へとうら山の自然が移り変わっていくを感じることが出来ます。

6月のホタルの観察会では、小形山地区の方が守ってきた昔からの都留のホタルを見ることが出来ます。

9月の秋のうら山たんけんでは、キノコや秋の草花など秋に見られる生き物を通して、うら山の秋を感じる事が出来ます。

10月のナイトハイイクでは、夜の大桑山の森に入り、昼とは違う森の雰囲気を感じながら、ムササビやノズミの観察をします。

11月の森の工作では、大桑山の森にある落ち葉や木の実や枝などを使って、自分だけの作品を自由に作れます。

12月のリスの観察会では、大桑山の小屋の中でリスを観察します。

このように1年を通して、都留の豊かな自然を体験できます。野生の生き物たちが普段暮らしている様子を実際に見られるのが、うら山観察会の魅力です。親子で一緒に来ても楽しめます。

ぜひ、みなさんも一度うら山観察会に来てみてください。

（\*）16頁に関連記事があります。  
（こんともか・社会学科2年



フィールド・ミュージアム部門では、私たちにもっとも身近で親しみのある場所として大学のキャンパスをとらえ、ここをフィールド・ミュージアムの「自然に親しむ入り口」に位置づけてきました。そしてキャンパスでは身近な自然に関心を向けることの楽しさを伝え、誰もが日常的に自然とふれあい、親しむことのできる活動を展開してきました。

地域交流研究センター入り口には、チョウやトンボと出会う小さなピオトープが設置されていますし、2003年6月からはキャンパスの生きものを記録し、地域のかたがたや学生、教員と情報を共有する試みとして「フィールド・キャンパスだより」を発行してきました（2010年11月で114号となりました）。

さらに、2004年からは附属図書館のピオトープをチョウやトンボ、鳥との出会いを楽しむ場所として環境整備を始めました。ここでは、そのピオトープの世話を続けてきた学生の一人に感想を記していただきました。（北垣憲仁、フィールド・ミュージアム部門責任者）

## 五感で味わうピオトープ

■尾崎万奈

私たちは、今年度から毎週火曜日に、図書館横のピオトープの手入れをしています。私がピオトープの手入れに関わりはじめてから、半年が過ぎました。ピオトープの木々たちの微妙な色合いの変化を楽しみながら、草をとったり、水草を取り除いたり、花を植えたりといった作業をしています。今は、カツラの木が素晴らしい色合いで紅葉しています。陽のあたり具合によって、葉の色が緑から黄色、赤に変わります。一本の木が見せてくれるたくさんの色に驚きます。カツラの木のかわいいハートの形をした葉は、私のお気に入りです。

ピオトープでは五感のすべてを使い、さまざまな角度からその美しさと楽しさを味わうことができます。例えば、春から夏にかけては、ピオトープに植えてあるミントやレモンバームなどのハーブを使い、ハーブティーを作りました。ハーブティーは数種類のハーブを混ぜて作っていたのですが、何度も作るうちに自分たちの好みの割合がわかってきました。7月末に開いたお茶会では、その場で採ったばかりの新鮮なハーブを使い、出来のよいハーブティーを提供することが出来ました。今年のお客さんは3人でしたが、来年はもっと多くの人にハーブティーとともにピオトープを楽しんでもらいたいと思います。

じつは、図書館の談話室は、エゴノキにエサを求めて飛んでくる鳥を観察する絶好の場所となります。図書館1階のピオトープ側の席は、緑にかこま

れて勉強している気分になれるおすすめの席です。また、ピオトープの道沿いには、それぞれ独自の視点で書かれた植物の解説パネルを設置しています。図書館横のピオトープという存在に気付いてくれる人も少しずつ増えてきたのではないのでしょうか。

ピオトープを歩きながら、図書館で本を読みながら、多くの人がいつでも自然を身近に感じられるようさらなる工夫を試みていきたいです。すぐ近くにある木や、鳥や、自然にもっと目を向けてもらえるよう、これからもピオトープの手入れを楽しんでいきます。

（おさき まな・比較文化学科4年）



# ムリネモのエンカウンター・スペースづくり

ムササビ・リス・ネズミ・モグラ

平成19年度に採択された現代GP「山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取組」フィールド・ミュージアムへようこそ」で本学のキャンパスにムササビのライブカメラが設置されました。2008年9月29日に巣箱をかけ、2010年4月27日にインターネットによる中継を開始しました。現在、ライブカメラは地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門と情報センターが連携して運営にあたっています。運営開始から関わってこられた情報センターの大輪知穂さんにお話を伺いました。（なお本文は、2010年11月29日に情報センターでおこなったインタビューをもとに書き起こしたものです。）



## 大きな可能性を秘めた

### ライブカメラ

■大輪知穂

私はもともと生きものが大好きです。ムササビはじめてライブカメラで姿を見たときはその長い尾などに感動しました。ふだんは情報センターで仕事をしていますが、現在は地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門と情報センターとでムササビのライブカメラを運営しています。

キャンパスの「ムササビの森」に設置してあるライブカメラの中継を開始したのは2010年4月27日からです。現在は都留文科大学のホームページ上で閲覧できます。学内でも自然科学棟の1階と学生食堂でモニターをおして見ることができます。近く附属図書館の入り口にもモニターを設置する予定だと聞いています。

私もムササビのライブ中継が始まってから、毎日、一度は映像を見るようになりました。また学生や職員の反応も高く、相当なアクセスがあります。みなさんの感想を書き込みできないか試行錯誤をかさね、7月1日より書き込みができるようにしてあります。みなさん関心をもっておられるようですが書き込みとなると躊躇するのでしょうか、いまのところコメントはあまり多くはありません。もしかすると前の人のコメントが見えないほうが書き込みをしやすいのかもしれない。ムササビを観察し映像を

公開しているほかのサイトを参考にこれからも工夫をかさねていきたいと考えています。

ホームページの映像を見ることでムササビに関心を持つて頂けると思います。そうすればムササビにも会いたくなるでしょうし、ムササビが住む森にも愛着がわくはず。小学校と映像を介した交流や、学生・市民向けの観察会など可能性は大きく広がっていくと思います。これからの楽しみですね。

私もライブカメラの映像に映るムササビが森のなかを元気に滑空する姿をじっさいに見てみたいです。今では、大学に向かうたびに今日はムササビ元気かなと気になります。

（おおわ ちほ・本学情報センター職員）

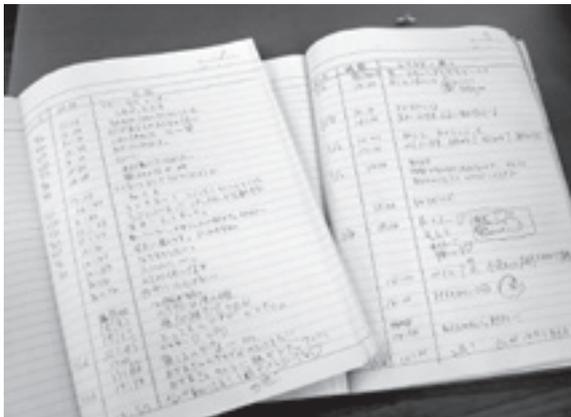


## ムササビカメラの映像について

■ 志村夏樹

カメラを設置した巣箱でムササビの子どもが生まれたのは、2010年3月21日のことです。左の画像は7月26日に撮影された親子のムササビと、4月20日に撮影されたムササビです。撮影された時点で巣箱にいたのは、親のムササビが2匹と、子どものムササビが2匹でした。

ムササビは日中のほとんどを巣箱で寝て過ごしていました。早朝に観察すると、巣箱の中で寝返りをうっているムササビの姿が見られますし、日中は寝苦しそうにしているムササビの姿を見ることができました。7月の画像のようにふだんは、寝ているムササビを観察するのがほとんどでしたが、まれに日



中でも活発に活動する姿を見ることがありました。

4月の画像では、小さな手足を使って器用に巣箱を駆け上がりながら、巣箱の外へ出ようとするムササビを観察できました。とくに春先から夏にかけて暑くなってくると外に顔を出す回数が増えていったように感じます。

また、ムササビが寝ているときには子どもの姿を確認するのが難しかったです。まだ生後まもない子どもは親が包むようにして寝ているため、どこに子どもがいるのか分からない時もありました。2匹の子どものムササビが、巣箱が窮屈になるほどに日々成長する過程を観察できたのは大変嬉しい経験となりました。

(しむら なつき・地域交流研究センター職員)

次にライブカメラの感想ノートの書き込みを紹介いたします(一部抜粋)

- ・動いていない。お母さんは心配です。
- ・ねてる。ツメがわかる。起きた！ごろごろ回転してる。
- ・活発にもぞもぞしている。
- ・うごかない！うごいた！！もここもここ。
- ・親が外にでていきました。
- ・寒いらしくてしっかりと寄せ合っています。
- ・ねてる。体勢がなかなか決まらないのか…丸まったりおおむけになったり、もぞもぞしてます！
- ・なにやらもしよもしよと動いています。たまに壁をよじ登ろうとするとところがCieです。
- ・もちよ、と動いています。2匹の上に大きい1匹が乗ってしまった!!!どうなる!?上の2匹!!
- ・巣立ってしまったのかな?帰って来ない。

# 「キャンパスにリスを呼ぶ会」の発足

多くの方がたのご参加を

■鳥原正敏

本年度の春、畑（潤）さんと北垣（憲仁）さん、そして私の三人で「キャンパスにリスを呼ぶ会」を設立し、クルミの苗を植える活動を始めました。

この活動の目的は、クルミの木を植樹し、リスとのエンカウンタースペース（出合いの場）を、キャンパスの中に創ることです。また、クルミの木の苗については、その種（実）の採取、播種の記録があり、クルミの木を中心とする植生の観察・研究の可能性をもちます。そして今日、里山を中心に、野生生物との「共生」ということが大きなテーマになっていますが、本活動は、そのことを実践的に考える一つのヒントになることを期待するものです。

クルミの木は植樹してから7〜8年くらいで実をつけ始めるとされます。このように未来へ可能性を提案し残してゆくことは、人の心を豊かにはぐくむ楽しい活動でもあると思います。

すでに本年度、多くの方々のご協力のもとに10本のクルミの苗を植えることができました。今後、さらに多くの方々にご参加頂けることを期待しています。

（とりはら まさとし・「キャンパスにリスを呼ぶ会」会長

フィールド・ミュージアム部門担当

## キャンパスにリスを呼ぼう

■石川あすか

昨年から苗の準備を経て、いよいよ本学の構内にリスを呼ぶ計画がスタートしました。舞台は本学東側の、「うぐいすホール」へと続く道であり、キャンパスと森とのあいだに当たるところです。ここにクルミの幼木を合計十本植えました。道路に並ぶサクラや、今回植えたクルミ。今ある木とこれからのびる木の枝葉を伝って、リスが森から降りやすいように、美術棟の裏からグラウンドの中まで一本の道をえがいて並べています。

この一帯は、学生や市民のかたが歩いて通るのをよく見かける場所です。クルミの木を通して、いつもの道が人とリスとの交流の場になったらいいなと思います。

（いしかわ あすか・社会学科3年）



実生から育てたクルミの苗



2010年7月13日

# ネズミとモグラとの出会いの場づくり

ムササビ、リス、ネズミ、モグラ。本学のキャンパスに暮らす野生動物との生きいきとした交流を楽しもうと、出会いの場所づくりが始まりました。ムササビのライブカメラの取組も、「キャンパスにリスを呼ぶ会」もその試みの一つです。

さらに、野ネズミやモグラとの出会いを楽しむ場所をつくらうと、学生による試みも始まりました。ここでは、モグラの仲間であるヒミズや野ネズミの観察装置をつくり、観察をつづけている井上大輔さんにこれまでの経緯や感想を記していただきました。



## ヒミズを観察する装置をつくる

■ 井上大輔

「ヒミズは可愛い。ぜひ見たいので、調べてみたい。」そんな軽い気持ちで調べはじめたヒミズ。ヒミズは親指ほどの大きさのモグラです。ヒミズが使っていると思われる小さな穴は見つかったのですが、これまで生きた姿を見ることはできませんでした。こうした悔しい気持ちですが、ヒミズを観察する装置の作成へのきっかけになりました。

今年（2010年）7月に北垣憲仁先生と、水槽に穴を開けて作った「出会いの箱（エンカウンター・スペース）」やガラスを地面においてヒミズやアカネズミがトンネルを移動する様子が観察できる装置を自然科学棟の斜面に設置しました。この斜面は自然科学棟の2階の研究室に近く、教室から観察することもできます。ヒマワリの種など食物を置きながら装置の様子をチェックしていきました。ガラスの下にできたトンネルは日を追うごとに長くなり、新しい通路ができる様子や変化がわかります。

水槽でつくった観察装置には、アカネズミやヒメネズミがヒマワリの種を食べにくるようになりしました。現在は食物を置けば翌日にはなくなっているという状態です。しかし、しばらく食物を置かないでいると姿を見せなくなり、また雨や風が激しい日にも姿を観察できなくなることがあるということも分

かりました。いまだにヒミズの生きた姿は観察できていません。

今後は、ヒミズの観察会を開催したいと思っています。観察装置の様子を記録するとともに、昼間にヒミズが観察できるかを確認するための事前の観察をおこなうなどして準備をしていきたいです。

ヒミズの観察装置の作成や食物となるヒマワリの種を置く作業を通して、私は動物の観察の大変さを学びました。都留はあたりを自然に囲まれていて、野生動物とも近い環境であるにも関わらず、意図的にこちらから見ようと計画しても、簡単には見るこゝとが出来ません。しかし今回の経験から、日々変化していくヒミズの通り道を観察することの楽しさも学びました。この学びを私だけでなく、たくさんの人にも経験して欲しいと思います。

（いのうえ だいすけ・初等教育学科4年）



# 中屋敷フィールド



中屋敷フィールドでは、地主の渡邊宗男さんのご指導をいただきながら、稲作、麦作に取り組んできました。当地での稲作は2004年から、麦作りは2005年から始めました。種まきや水の管理、脱穀など一通りの作業を体験しながら里山の現状をじかに学ぼうというのが大きなテーマです。

さいきんはイノシシやシカなど大型獣との遭遇が増えてきました。こうした大型獣との共生のありかたを現場で考えようというのもわたしたちの大きなテーマの一つになっています。

ここでは、一年間、中屋敷の畑に通った2名の学生に感想を記していただきました。

## 手作業による

## 稲作を体験する楽しさ

■前澤志依

6月中旬。中屋敷フィールドでの米づくりはまず苗床作りから始まりました。そこで私が最初に驚いたのは、苗床をすべて手作業で作ること。実家でも米づくりをしていたので、その手伝いを毎年のようにしていましたが、機械を使って行う作業がほとんどでした。なので、すべて手作業で作っていくということがとても新鮮に感じました。苗床づくりは、蜂の巣のように細かく区切られたポットのなかに土と籾殻を均等にいれるという作業です。単純な作業だから思ったよりも簡単かも、と油断していたせいか、じつさいに取り掛かると思ったようにはうまくいきません。土を入れたらポットの形が崩れてしまったり、籾殻が全てのポットの中に入ってなかったり。失敗をしてはやり直しの繰り返しでした。全部で6つほどの苗床を2時間以上かけて作りました。時間と労力がかかった分、達成感があり、完成してきれいに並べられた苗床を見ると自然と頬が緩みました。

次に私が参加した作業は、田植えを終えてから2週間ほど経った7月下旬に行われた稗抜きです。私にとって稗抜きは初めての体験。最初「稗」と言わ

れても何のことだかピンとこなくて、田んぼでよく見かける稲と似ている草のことだと理解するのに少し時間がかかりました。稗を抜かないと栄養が稲ではなく稗のほうにいつてしまうということで、一列ずつ目を皿のようにしながら稗を探していきます。しかし、稲も稗も似たような形で青々とした色をしているのでなかなか見分けが付きません。間違えて稲を抜きそうになることも。対策として、苗の太さと列から飛び出しているかどうかを基準にして抜くようにしました。

機械でなく、ほとんどの作業を自分たちの手で行う米づくりは想像以上に大変な作業で、家に帰ったらすぐに寝てしまうことも何度もあります。その分、自分たちで作った米で炊くご飯はおいしいだろうなと収穫を楽しみしながら、残りの作業も頑張りたいです。

(まえざわ しおり・国文学科1年)



## フィールドに通う魅力

■ 牛丸景太

初めて中屋敷フィールドの麦畑を訪れたのは5月の上旬のことでした。人家から少し離れた山裾に麦畑が作られ、フィールドに寄り添うようにして谷川が流れています。瀬音の響くのどかな所で、周囲の自然にいだかれた場所という印象を持ちました。この日は麦の土寄せ作業のために訪れていました。私はこうした農作業が好きでそれなりに経験もあったので、意気込んで麦作りに参加し始めました。

麦作りに携わるなかで、フィールドに対する私の認識も少しずつ変わってきているように感じます。はじめは単に作物を育てて農作業を経験する場所としか考えていなかったのですが、今では「出会い」の中心の場所でもあると考えています。例えば収穫や乾燥の頃合、脱穀など、麦作り全般にわたって指導してくださった都留市在住の渡邊宗男さんや、収穫した麦を小麦粉に製粉していただいた上野原市の小俣トシコさんたち地域の方々との出会いがありました。また人との出会いだけではなく、中屋敷フィールドでは田畑をすること以外にも自然観察をおこなっていて、私は水辺に集まる生きものや季節ごとに咲く草花、木の実などを観察することができました。畑で作業をしたり周辺を歩いたりしながらさまざまな生きものに出会うことも中屋敷フィールドに通う魅力のひとつです。

しかし、いつでも野性の生きものに会えるわけではありません。人であれ野生の生きものであれ、出

会いはいつも偶然です。だからこそ、その時々のお会いがとても貴重なものを感じられます。今後も人と人だけに限らず、身近な自然のなかでの出会いを大切にしながら中屋敷フィールドに通っていきたいと思っています。

(つしまる けいた・国文学科1年)



# フィールド・ミュージアムと 小学校・親子との交流

フィールド・ミュージアム部門と都留市立谷村第一小学校との交流が始まりました。フィールド・ミュージアム部門が管理・運営をしている『奥隆行写真コレクション』（19頁に関連記事）を4年生の総合学習のなかで活用し、部門の機関誌『フィールド・ノート』（14頁に関連記事）の編集をしている学生と交流しようというものです。授業では、「地域の人をとおして、都留の環境について学ぼう」というテーマのもと、同コレクションにある都留で過去に撮影された遊びにまつわる写真を選びました。子どもたちはそれらの写真を用いて過去の遊びを家族のかたにインタビューしました。授業では今後、地域の人と自然について取材し編集をしている学生との交流が予定されています。

## 谷村第一小学校との交流

### 自然は僕らの遊び場だ

■上田 司

「昔の生活の中には人と身近な自然とのつながりがあり共存していた。つながりがなくなってきたから自然を大切にしようという意識も薄らいでいるのではないか。」昨年度、都留市環境教育副読本づくりに取り組み、地域の方と話す中で学んだことである。この人を通して自然にふれ、考えるということ子どもとしたいと思った。

自然と生活とのつながりといっても、子どもたちには難しい。そのとき、思いだしたのが地域交流研究センターから以前いただいた「子どもが川遊びをする昔の写真」であった。同センターと連絡をとり、北垣憲仁先生とのつながりの中で授業を進めていくことにした。

まずは子どもたちと三世代にわたる自然に関わる遊びを調べた。子どもたちからは「祖父母は、竹をとることも遊びであり、どこにあるのかも知っている。竹も工夫しながら遊びにしている。」などの意見が出された。さらに詳しく調べたいということで、家庭でインタビューをしていくことにした。北垣先生からアドバイスをいただき、話を聞くだけではなく絵に描いてもらうことにした。集まった絵からは写真にはないその人の思い入れが感じられた。しかし子どもたちは、遊んだ経験がないために他の子ども

もにうまく説明ができない。そこで、土曜参観日に保護者と子どもでグループを作り、絵をもとに話し合うことにした。保護者から「思いだした。」「私もやりました。」「私の場合は：。」という声が聞かれた。祖父母の参加もあり三世代で話をする場面も見られた。今後は、絵と聞いた話をマップに貼り合わせ、自然の移り変わりや遊びが伝わらなくなったわけを考えていきたい。

自然を愛しむ気持ち、自然を理解しようとする気持ちは、自然の中の気づきや発見、人を通じて知ったことや考えたことから始まるのではないだろうか。

（つくだ おさむ・都留市谷村第一小学校教諭）



## 谷村第一小学校での 授業を参観して

■ 桜井明子

10月23日、谷村第一小の参観日に4年生の授業を見学してきました。参観日に来た保護者と小学生でいくつかグループをつくり、保護者のかたに遊びについてお話を聞こう、という授業です。私もグループに加わって、子どもたちと保護者とのやりとりを耳を傾けました。

ご両親だけでなくおばあちゃんも参観に見えていて、年齢幅も広く、どのグループでも話が盛り上がります。川遊びについて話していたとき、ある男性の保護者はお父さん（子どもたちにとってはおじいちゃんにあたる）につくってもらった道具をつかって魚をとっていたという話をしてくださいました。谷一小に通っていたその男性が5、6年生だったころ、自転車に乗って仲間たちと戸沢川まで行っていたそうです。

私は2008年の11月から、野外遊びを中心に都留市郷土研究会のかた（70代から80代）にお話を伺っています。そのなかで、桂川の下流にダムができ川にゴミが捨てられることが多くなった昭和30年代ころを境に、川との付き合い方が変わってきたことを伺ってきました。

この授業参観でお話を聞いてみると、「川とのつきあい方」も多様であることがわかります。60年以上も前から今に至るまで、川との関わりが薄くなってきたとはいえ川との関係が断絶していないこと

は、話を聞いているとわかるからです。

この授業で幅広い年代の方と交流し、かつての「遊び」に耳を傾ける子どもたち。子どもたちの成長の過程で、この経験がどんなふうに影響を与えていくのかも興味深いです。遊びの話は誰とでも共有でき、何よりも楽しい。

4年生たちはこの日の聞き取りを発展させ、これまでどんな場所でどんな遊びをしていたかがわかるような「遊びの地図」をつくっていくようです。どんな地図ができていくか楽しみです。そして、私も残り少ない学生生活のなかで彼らとかかわっていきたいと思っています。

（せくらい あきこ・社会学科大学院2年）



授業で参考にした『奥隆行写真コレクション』

# 『フィールド・ノート』

2002年に発行を開始した『フィールド・ノート』は、現在では地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門の機関誌に位置づけられています。「地域の自然と人との交流」をテーマに学生がみずから企画を練り、文章やレイアウトを仕上げしていきます。年4回、各400部発行しています。学年、学科の枠をこえて19名の学生が編集作業に参加しています。県内外から多くのかたがたの定期購読の希望があります。1年生のときから編集に参加した西丸堯宏さんにこれまでの経験を振り返っていただきます。



## 『フィールド・ノート』 との出会いから

### ■西丸堯宏

私は『フィールド・ノート』の編集に参加して、今年で3年目になりました。現在は編集長として、部員15人と一緒に冊子づくりをたのしんでいます。3年目の今でも、取材に行くときは「どんな人に出会えるだろう」、「自然はどのように移り変わっているだろうか」などと胸が高鳴ります。取材をおして、地域の方々や自然と多くのつながりを持つことができました。私にとって都留は、今や第二の「ふるさと」といえる場所です。

2010年9月3日、夕方の6時頃に大学のうら山を歩いていたときの事です。頭上でガサガサと音がしたと思うと、2匹のリスがヒノキの枝から枝を走り去っていきました。ほんの数秒の出来事でしたが、じかに野生の動物をみたときの感動は計り知れません。最近ではこんな経験をするたびに、どうしたらこの感動を人に伝えられるだろうかと考えてしまいます。

いつも『フィールド・ノート』では、このような感動や気づきを部員それぞれがどうしたら読者の方々と共有できるかというのを考えながら、冊子づくりをしています。週に1度の編集会議で意見を

出し合い、何度も原稿を書き直し、3ヶ月ほど掛けてようやく冊子が完成します。

私は3年間つづけてきて、文章を書くことは自身と向き合うことでもあると思うようになりました。自分がなぜそれに惹かれ、何を感じ、学んだのか。人に伝えるためには、自身の体験をより深めることが欠かせません。

私は最近『フィールド・ノート』で取材をかさねるたびに、都留のほんとうの広さを感じています。面積や人口では計れない人の暮らしや自然の多様さが、僕にこの「広さ」を感じさせているのだと思います。

卒業までにあとどれだけ都留について知ることができるか。そこでの私の体験を『フィールド・ノート』に綴ることをおして、できるかぎり多くの人たちと共有していければと思います。

(にしまる たかひろ・社会学科4年)



# 夏休み親子自然教室

## 「夏休み親子で楽しい自然・科学教室」 実施報告

■ 山森美穂

昨年引き続き2回目の「夏休み親子で楽しい自然・科学教室」を、8月5日に開催しました。今回は「葉脈しおりを作ろう」「目指せ！スライムマスター!!」の2講座を実施し、それぞれ生活環境科学（吉住典子）ゼミと化学（山森）ゼミが担当しました。「親子」と銘打ちましたが、平日開催もあつてか参加者がなかなか集まらなかったため、子どもだけの参加も可としました。地域の自治会や大学職員のご家族のご協力で、大人4名、子ども23名の参加を得ることができました。どちらの講座も楽しんでいただけたようです。

「理科離れ」が指摘されるようになって久しいですが、近年とくに問題視されているのは「小学校教員の理科離れ」です。この企画は、子どもをはじめとする地域の方たちの理科への興味を伸ばす機会となることを目指していますが、小学校教員を目指す学生たちにとっての意義ある体験にもなっており、今後も継続していきたいと考えています。参加者、関係者の方に心より感謝いたします。

（やまもり みほ・初等教育学科教員）

## この経験を生かしたい

■ 宮城美里

私たち化学ゼミは、いつもとは一味違ったスライムを体験してもらいたいと考えました。砂鉄入りのスライムに磁石を近づけたり、スライムに酢や塩を混ぜて変化を見る実験を行いました。スライムの原理を子どもたちにわかりやすく伝えるにはどうしたらいいかを考えたことは、とても勉強になりました。この経験をこれから生かしていきたいと思えます。

（みやぎ みさと・初等教育学科4年）

## 子どもたちの笑顔が嬉しい

■ 草場 裕

私はスライムの作り方の説明を担当しました。自分たちなりに準備を重ねてきたつもりでしたが、よりわかりやすい説明ができればというのが反省点で

す。もっとスムーズに実験を行うことができたと思います。しかし、子どもたちが意欲的に実験に取り組む姿と、スライムができた時の笑顔が見られたので、良かったです。

（くさば ゆたか・本学初等教育学科4年）

## 奥が深いスライム

■ 村上 彩

私は、いままで楽しく作って遊んでいたスライムがどのようにできているのかをロールプレイング形式で説明しました。子どもたちには難しかったかもしれませんが、少しでも理解して興味を持ってもらえていたら嬉しいです。スライムはとても奥が深く、教える立場の私たちも知らないことが多くあり、今回の準備を通してとても勉強になりました。

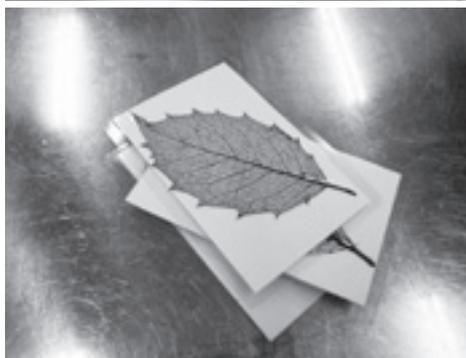
（むらかみ あや・初等教育学科4年）



薬品で処理した葉を歯ブラシでたたいて、葉脈だけにします



好きな色のスライムができた！



完成した葉脈しおり



# 都留市社会教育との交流が進む

## 都留市中央公民館と

## 都留文科大学・地域交流研究センターの関わり

■ 奥平正純

都留市中央公民館と都留文科大学との関わりについて、現状の具体例を挙げてみます。

一、「公民館自主学級」には「子まつり学級」と「わくわく学級」があります。

「子まつり学級」は、大学の学生が指導員となり、小学生の子どもたちとさまざまな遊びを实践し、その中で、お互いを思いやる気持ちを育むことを目的としています。「わくわく学級」は、大学の学生が中心となり、さまざまなイベントを企画し、学生と市民の大人や子どもたちと楽しみながら交流することを目的としています。この二つの学級は、設立以来七年目を迎えています。

二、「公民館教室」には、「うらやま観察会」があります。

この観察会は、都留文科大学が提唱する「フィールド・ミュージアム構想」を実現するために、「子どもたち」と「自然」の懸け橋になることを目的とし、大学の学生が中心となり、市民とともに運営する教室です。二十二年目を迎える今年度は、九回（延べ実施日数十八日）を計画しています。

三、「はつらつ鶴寿大学事業」では、社会経済学講座に大学の先生の出張講義をお願いし、日本の経済についてわかりやすく講義をしていただいています。今年で三年目になります。

四、「青少年育成都留市民会議」では、青少年の健全育成を目指す啓発活動の一つとして、市広報誌に毎月「健全育成シリーズ」を編集・掲載しています。平成三年度に始まり、今年度で二十年を迎えます。今までは、市内小中学校の先生方を中心として、執筆して頂いておりましたが、今年度から、都留文科大学の先生お二人にお願いし、今までと異なる新たな視点から執筆を

して頂いています。

五、「都留市青少年育成会連合会」では、毎年七月に市内約九十地区の育成会長に参集していただき、夏季事業打ち合わせ会を開催していますが、その中で研修会として、青少年健全育成に関わる講演会を実施しています。今年度は、地域交流研究センターから、北垣憲仁先生をお招きして、都留市の自然やそこに暮らす野生動物の素晴らしさを講演して頂きました。

このように都留市中央公民館と都留文科大学とは深いかわりを持つています。若年層から中高年まで幅広い年代の利用が求められる公民館にとって、大学の存在は、公民館活動を支える大きな力になっていると思います。

今後の取り組みの課題としては、地域及び大学にとって今にも増したメリットが生まれるために、公民館が、地域と大学を結ぶパイプ役として、更なる多様な連携の在り方を検討することが必要であると考えます。

（おくだいら まさすみ・都留市中央公民館・社会教育指導員・青少年育成カウンセラー）



# 市立図書館と 都留フィールド・ミュージアムの連携事業

都留フィールド・ミュージアムの地域交流事業に今年新たな展開がありました。秋の読書週間恒例、都留市立図書館との共催による企画資料展に加え、同館の「図書館まつり」に初めて参加しました。

## 都留フィールド・ミュージアムと読書週間行事を共同開催して

■ 青池恵津子

▲ 図書館まつり〜みんなで知ろう、歌おう〜都留の自然、11月7日 都留市文化会館4階大ホール

都留市立図書館では、読書週間をきっかけに多くの市民、さまざまな世代の方々に図書館に親しんでいただくよう、毎年趣向をこらして「図書館まつり」を企画しています。これまで「塚原成幸さんのパッケマンショー」、「楽つみ木ひろば」、「ガリレオ工房サイエンスショー」等を開催してきました。

今年も「国際生物多様性年」にちなみ、「ふるさとの自然再発見 みんなで知ろう、歌おう〜都留の自然」と題して、都留文科大フィールド・ミュージアム（以下「都留FM」）の全面的な協力を得て実施しました。企画は、都留FMによる「ムリネモの森へようこそ」と題した身近な里山にすむ生きものの暮らしやムササビの滑空シーン等が入ったスライドの上映、「ひとと自然の共生」をテーマに市内朝日馬場を拠点に全国各地で自然保護活動が続けてい

る歌手のしらべ、みちよさんによる歌とおはなし（写真2）、図書館から自然保護関連書籍の紹介と立体的に構成しました。また、都留FMには昨年、上野の国立科学博物館で開催された「大哺乳類展」（\*）における展示の一部を会場内に再現していただき（写真1）、広範な市民にその活動が紹介されました。し

ら、いさんは市内の神社に30年にわたり森から隔離されて生きるムササビの保護と救出をうったえ、「みんな大切ないのち」と来場者の共感を得ました。今年度の図書館まつりは、図書館、市民、フィールド・ミュージアムそれぞれの思いが響きあう企画となりました。

\*「大哺乳類展」についてはセンター通信No.17参照

## B 谷の町・史の里企画資料展

「市民の読書の記憶・記録」読書週間の歴史とともに  
10月26日〜11月9日 市立図書館閲覧室

今年の「谷の町・史の里展」は、2010年国民読書年「企画として、戦後「読書の力によって平和な文化国家をつくらう！」と始まった「読書週間運動」60年の歴史を取り上げました。都留市と都留大の歴史に重ねて読書週間のポスターと標語及び市立図書館の蔵書や記録資料を展示し、地域の読書と図書館活動の足跡を辿りました。市と大学創成期の市立図書館の利用統計等も展示し、図書館から見える都留大とまちの関わりを探りました。この企画はまた、「谷の町・史の里 図書館のあゆみ展」（2006年）の戦後部分を補う企画となりました。並行して開催した「私がすすめる一冊展」では、市民及び都留市ゆかりの人びと（60名）から心に残る一冊が紹介されました。（写真3）

（あおいけ えつこ・都留市立図書館司書）



写真1 「ムリネモの森へようこそ」



写真2 市のマスコットキャラクター「つるびー」と「ムササビの唄」を合唱♪ぼくたちの森をつくって!



写真3 「私がすすめる一冊展」 市民の読書の記憶

# 市民グループとの協同の実践

## 自然とふれあう豊かな経験を

■ 矢羽正子

国際ソロプチミスト山梨―芙蓉は、都留文科大学地域交流研究センターとの協働で小冊子『フィールド・ミュージアムのたのしみ』・『フィールド・ノートマップ』を発刊いたしました。毎日数時間の散歩を日課とされる今泉吉晴・北垣憲仁両先生のエッセイから、散歩で出会ったさまざまな人や動物、植物との温かなふれあいが伝わり、魅了されます。折り返んで散歩に連れていかれるマップは、大きな自然の世界につながります。運が良ければ小動物に出会えるかもしれない期待に心躍り、見落としてしまう控えめな小さな花の愛らしさが心を捉えるでしょう。小鳥の営みから、拡がっていく感性の豊かさに触れ、散歩への期待が高まります。

この小冊子とマップとの出会いで、多くの方がフィールドを散歩されて、都留の美しい風景や小動物に親しみ、散歩を楽しまれる手掛かりとなりました嬉しく存じます。

1985年、ソロプチミスト山梨―芙蓉が認証されて間もない頃と思うのですが、餌場と山との往復に必要な木が切られ、神社の森に閉じ込められたムササビのためにヤマボウシやヤマザクラの苗を植樹したことがあります。会員は、まだ自然についての関心が低く、ただ植樹だけの思い出ですが、その後、都留文科大学フィールド・ミュージアム部門と連携した「むささびの森」の手入れや愛知万博最終日に行なったビオトープでの「アジアの子ども達の植

樹祭」など未来の地球のための活動では、たくさんの方と出会い、自然への思いが深まりました。

自然とのかかわりはもうとつくに大人だった私たちでもその後の生き方に大きな刺激を受けましたので、大切な経験と存じます。幼児や小中学生、高校生の皆さんに自然とふれあう豊かな経験をたくさんしていただけたらと願っております。

(やば まさこ・国際ソロプチミスト山梨―芙蓉広報委員会)

\*『フィールド・ミュージアムのたのしみ』・『フィールド・ノートマップ』をプレゼントいたします。お申し込みはお電話・またはお手紙で下記に

〒402-0034

都留市桂町1239-1 東桂保育園

☎0554-43-7185

月～土曜日・10時から18時まで





フィールド・ミュージアム部門では、都留市在住の奥隆行さんによる一連の写真コレクションを「デジタル化し、保存・管理をしています。デジタル化した資料は、「奥隆行写真コレクション」と名付け、誰もが活用しやすいように3冊の冊子にまとめました。その後、都留市郷土研究会の有志のみなさんとむかしの遊びをテーマとした「野外遊びの記憶を語る会」を月に1度開催するなど、コレクションを活用してきました。

今年、中学校の学習の教材として「奥隆行写真コレクション」を活用したいという提案がありました。活用成果と写真素材を教材として活かす可能性について、都留市立第二中学校の渡辺功資氏に記していただきました。

## 「遠いところの、遠い出来事」をより身近なものへ

■ 渡辺功資

社会科の教職員となつて以来、歴史の授業や平和学習で戦争を扱う場面では、大きな壁が常に生徒の前に存在していると感じていた。授業で扱う学習内容が、生徒にとって「遠いところの遠い出来事」と受け止めているだろうということである。

生徒のそうした受け止め方を打破し、歴史学習、平和学習の学習内容と自分との「すりあわせ」を可能にし、「より身近なもの」にできないだろうか、そんなことを考えているときにこの都留文科大学地域交流研究センターのデータ化された写真素材の存在を同僚教師から知らされた。

「日常の授業の場面において過去、とくに明治以降の歴史学習の内容をこの地域の過去の写真と対比しながら生徒に提示することで、「遠いところの遠い出来事」を「より身近なもの」に感じられると考えた。その最初の試みとして9月に実施した都留二中の学園祭で「地域の戦争」を扱った学年創作劇の中でセリフに合わせて、谷村、禾生小学校の写真や修学旅行での軍艦三笠の前での児童の集合写真などを映し出した。

他の教職員や保護者、生徒の中から「劇の内容、テーマがより身近なものと感じられた。」との感想が寄せられた。写真一枚の持つ力は、多くの言葉で説明するよりも強く、一瞬にして、それがこの地域での出来事だということを見ているものに認識させ

てしまう。

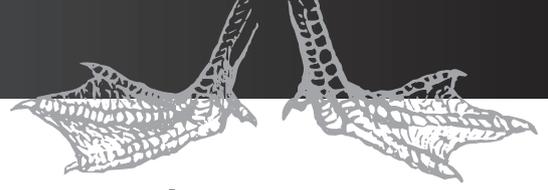
現在、歴史授業が明治以後の日本の変化という場面になっている。文明開化、大正モダニズム、さらには戦時体制化していく様子など、地域の写真を織り交ぜていくことで生徒には過去の物語でなく、曾祖父、祖父母の歩んできた道（時代）として「より身近な」歴史としてとらえるだろうことが予想できる。

また、同時に地域の変遷を映像で知ることは、今が過去の延長線上にあり、その先に未来があるという歴史観を生徒に持たせることにもなる。

地域交流研究センターの写真素材の活用の幅は、さまざまな可能性を含んでいるものであると確信している。

（わたなべ こうじ・都留市立都留第二中学校）





## 上野 国立科学博物館

# 「大哺乳類展」を振り返る

## 大哺乳類展と都留文科大学

■ 杉本光司

本学では、30年ほど前から、都留市という地域全体を博物館にみたくて、ここに生きる多くの動植物、そして人々を通して自然と触れ合う豊かな人間性を育んでいこうという「都留自然博物館」構想が、今泉吉晴教授（当時）が中心となって生まれました。この取組みは、地域交流研究センターの設立当初から、活動の柱の一つの「フィールド・ミュージアム」部門として掲げてまいりました。

今回の「大哺乳類展」では、全体監修者として、今泉吉晴氏が当たることになり、その展示の中に、「フィールド・ミュージアム」に関するコーナーを設け、これまでの本学での取組みの成果を展示するという構想により、展示協力の要請がされました。この「大哺乳類展」は陸のなかまたちということで、身近に生きる動物をテーマに研究を続けてこられた北垣憲仁氏が、構想に基づいた資料の収集を行いました。

また、理事会に対して「大哺乳類展」への「協賛」の依頼を広報委員会とともに申請し、承認の回答を得られたことは、都留文科大学とともに本センターが新たな第一歩を踏み出した瞬間でした。まさに広

く社会に周知させるための新たな取組みが、「大哺乳類展」の開始と同時に始まったのです。

この「大哺乳類展」では、第1会場（1章～5章）は、主に動物たちのはく製や骨格模型展示を中心にしたものでしたが、第2会場では、「第6章 森からの便り」というテーマで、ムササビ、リス、ネズミ、モグラのそれぞれ1文字を組み合わせた「ムリネモ」に代表される、身近な動物たちの残した痕跡をとおして、それらの動物たちと出会う方法について、北垣氏が収集した標本資料、写真、映像等によって説明されました。

一方、「第6章」の展示全体に対し多くのご意見やご指摘を頂き、5月1日の閉館後に、展示全体の改善工事が実施され、見学者に対して、より分かりやすい丁寧な展示へと生まれ変わりました。また、この展示スペースを利用した、本学学生による「展示解説」や北垣氏による2回のギャラリートーク、そして講演会の開催等、展示協力・協賛団体ならではの特別プログラムを実施することができ、予想以上の多くの人が参加してくれました。また、この取組みを通じた新しい交流の場も生まれています。

入場者も最終的には33万人を超え、「大哺乳類展」への展示協力・協賛の成果は、社会貢献という面においても高い評価を得ることができました。

（すぎもと てるじ・地域交流研究センター長



盛況だった講演会（館内講堂にて 5月29日）



上野公園の大ポスター

## 残したものが 生きているものと繋がる

■ 宮崎こころ

私は都留文科大学に来て初めてムササビを見ました。木から木へと滑空するムササビを見て「生」を感じ、人間だけの世界ではないのだと、あらためて強く感じました。このときの気持ちで国立科学博物館に来館された方とお話ができたらいいなと思います。「展示解説」に参加させていただきました。私の方から話しかけたり、子どもの頃見たというお話を伺ったり、「解説」の難しさも感じながらとても有意義な時間を過ごすことができました。

今回、「ムリネモの森」のブースで展示されているものの多くは、都留で生きる動物たちが生きてきた間に残したものです。来館された方がリスの食べたクルミやムササビの古巣など展示されたものを見て、森で生きる動物たちの様子を想像したり、家の周辺の身近な自然を思い浮かべたりしているのがよく分かりました。

残されたものに目をこらせば多くの生き物とつながり、私たちと身近な自然を繋げてくれる大きな手がかりになるのだと感じました。

(みやざき こころ・初等教育学科4年)

## 私の一生の思い出

■ 大澤昭彦

国立科学博物館は以前に何度か訪れたことがありますが、その展示の規模に毎回圧倒されていました。まさか、その国立科学博物館で解説をするチャンスがめぐってくるとは夢にも思いませんでした。展示会場では来館者の多さに驚きました。初めて見るモグラに感動する子どもたちや、「昔はよく見かけた」とムササビを懐かしむおじいさんなど、それぞれの来館者が違った表情で展示物を眺めていました。

来館者一人ひとりが違った見方で展示物を見ている様子がとても印象的でした。僕は多くの来館者に森に住む身近な生き物の解説をしましたが、その中で逆に来館者から教わることも多くあり、解説者側である僕もいろいろなことを学ぶことができました。

憧れの国立科学博物館での大哺乳類展で展示解説に参加できたことは、僕の一生の思い出です。

(おおさわ あきひこ・初等教育学科4年)



本学学生によるギャラリートーク (5月28日)



人気のギャラリートーク (6月4日)

# 都留フィールド・ミュージアム の歴史と思想をさぐる

都留フィールド・ミュージアムの歴史的、思想的素地を確かめながら、私たちの実践の意味や方向を探っていきたく思います。都留文科大学の歴史のなかでは、下泉重吉学長の時代の公開講座が、重要な位置を占めると考えられます(23頁)。この下泉学長時代に、ヤマネ研究者として知られる湊秋作氏が本学で学び、仲間と「動物学研究会」を作っていますが、やがて着任する今泉吉晴氏との研究交流も始まります(22頁)。

フィールド・ミュージアムを含む、都留文科大学地域交流研究センターは、都留文科大学のアイデンティティに関わるものとしての性格をもっていると考えられます。こうした着想を共有していく資料として大田亮学長の文章を抜粋します(24〜25頁)。

都留文科大学フィールド・ミュージアムの展開に触れながら、大田先生の提案により、埼玉大学が関与する見沼フィールド・ミュージアムが動き出しています。その埼玉大学での中心的な担い手の安藤聡彦氏は、27年前に今泉研究室を訪問されていたのでした(26〜27頁)。

私たちのフィールド・ミュージアムは、全国のさまざまな実践・事業と共通するものを持ち、相互に学びあえるに違いありません。本号では、平塚市博物館の実践に注目してみよう(28頁)。

本学地域交流研究センターは、出発の当初より、世界的な思想家、ヘンリー・D・ソローに触発されてきました。改めて『ウォールデン―森の生活』に目を向けて見ます(29頁)。ところで、ソローが「エコロジー」を最初に使ったとする文献が目に入りました。その真偽について、今泉氏に文章を寄せてもらいました(30〜31頁)。(編集部)

都留フィールド・ミュージアムの歴史的な成り立ちを考えるために、下泉重吉先生(23頁参照)の下でヤマネ研究を始められた湊秋作氏に文章を寄せていただきました。湊さんたちは当時「動物学研究会」を立ち上げられたわけですが、今泉吉晴氏が着任されてからは個人的な交流も続いたということです。今後、都留文科大学と清里のヤマネミュージアムとのゆるやかな交流が生まれることを願います。

## ヤマネ研究の情熱を育む

■湊 秋作

1973年の都留大。山の中にたつた一つしかない校舎の1階を一人の学生が、緊張した面持ちで暗い廊下のはしっこにある部屋へ向かっていた。「こんこん」と学生は、ドアをノックした。「ぎい」と開かれるとフクロウのような顔をした下泉学長が座っておられた。学生は、汗をかきかき、どもりながら言った。「ヤマネを卒論でやりたいのです。指導して下さい」と。先生は穏やかに「いいですよ」と言われた。

都留でのヤマネ研究のスタートであった。他の学生たちもヤマネ研究に集まりだした。ただ、実験するにも作業するにも都留大にはそんな部屋はなかった。一つを除いては、ぼろぼろで壊す予定の木造の美術校舎があった。ホコリだらけ校舎を掃除する学生。捨てようとしていた破れかけのソファを運びこむ学生たち。まさに「ホコリ」誇りあるヤマネ研究の夜明けであった。研究室を「動物学研究会」と僕は名づけた。

僕は三つ峠の宝鉢山側斜面と河口湖側斜面に標高100mごとに巣箱を設置し、標高と植生によるヤマ

ネの生息調査を行った。学生にとって慈父のような下泉学長はヤマネ研究の権威であり、「保育園長になりたい」と言う教育者であり、環境教育の先駆者でもあった。しかし、僕らが卒論完成を祝うために三つ峠頂上で、霜柱をバリバリ踏みながら、夜空の星に「下ちゃん、卒論やったよ」とい叫んでいたとき、先生はパラダイスへと飛び立っていた――。でも、動物学研究会は、先生のお弟子あるコウモリ研究者の森先生、環境教育のリーダーである青柳先生の指導の下、ヤマネ研究環境教育が発展していった。そして、今泉(吉晴)先生が赴任して下さいました。

和歌山の山奥で教員をしながらヤマネ研究をしていた僕は、毎年というほど、ヤマネ研究の資料を持ち、夜行電車を乗り継ぎ、都留に向かい、今泉先生の部屋を「こんこん」とノックした。先生は、いつもにこやかに、動物の観方のダイナミックさの広い世界を僕に教えて下さり、先生の自然への姿勢は僕の研究の指針となっていた。今、僕は、清里のヤマネミュージアム館長として、下泉先生がフィールドとしていた八ヶ岳で研究している。また、関西学院大学の教授として環境教育などを指導するようになった。

都留で「こんこん」と「不思議のドア」をノックすると向こうには、いつも広くて限らない世界があった。そんな「不思議な扉」がこれからも都留の地で育まれていかれんことを。

(みなと しゅつせく)

・ヤマネミュージアム館長  
関西学院大学教授



資料「昭和49年度 都留文科大公開講座開催要項」

地域交流研究センターの源流を探るといふ意味で、下泉重吉学長時代（1973年～1976年）の三つのことに注目してみます。一つは、下泉学長から、都留市の同意も得て大学付属の「自然保護教育研究所」の設立に向けての提案が教授会でなされているということ（1974年10月15日）。提案内容は、そのための調査研究委員会を設置するとい

うものでしたが、教授会では、「委員会」ではなく理科関係教員の「グループ的」なものとなされ、その後検討は前進しなかったようです（教授会記録に拠る）。

二つ目は、「自然と文化」という名称の、市民への公開講座が実施され盛況であったということ（1974年）。ここでは、その「公開講座要綱」の抜粋を資料として掲載します。この公開講座は、短期大学時代の「夏期大学」（1955年）以来のもので、今日にいたる公開講座の始まりとされます（『都留文科大創立五十年記念誌』2004年）。

三つ目は、「初等教育公開講座」（現職小学校教員）が1975年に開始されており、今日の「現職教育講座」へといたっていることです（同書）。（畑潤・編集長）

〔資料〕「公開講座要項」（1974年）の抜粋

- 1・都留文科大公開講座開講の趣旨（…略…）
- 2・講座名『自然と文化』
- 3・講座のねらい

この講座は、自然科学、文学、芸術、体育等のひろい視野にたつて、一般市民の教養向上に寄与することを目的とし、そのために講義と実習実技を通じて知識と技術を習得させ、自然に対する人間としての基本的な考え方の育成をはかることをねらいとする。

4・学習場所 都留文科大

5・開設時期 昭和49年6月29日（土）～9月7日

（土）10日間 毎週土曜日とし、8月10日は休講とする。

6・開設時間数40時間。土曜日午後1時から5時まで4時間。

7・募集人員・資格 約30名。年令18才以上学歴を問わない。但し、高等学校卒業程度の学力のあるもの。

8・学習日程及び学習課題と講師名（…各回の学習内容を略する…）

6月29日  
開講式  
自然保護と教育（講義）…下泉重吉（学長）  
自然と美術Ⅰ（講義）…中山義典（教授）

7月6日  
自然史と教養Ⅰ（講義）…篠原博（教授）

7月13日  
Ⅱ（実習）…

自然史と教養Ⅲ（講義）…森江晃三（助教授）

Ⅳ（実習）…

7月20日  
自然と文学Ⅰ（講義）…清水茂夫（講師）…山梨大学 教授）

Ⅱ（…）…稲垣正幸（教授）

7月27日

自然と体育Ⅰ（講義）…長鉄翁（助教授）

Ⅱ（実技）…

8月3日

自然と美術Ⅱ（実習）…河西万文（助教授）

Ⅲ（実習）…田島俊雄（講師）

8月17日

自然と音楽Ⅰ（講義）…有村祐輔（助教授）

自然と体育Ⅲ（講義、実習）…中野偉夫（助教授）

8月24日

自然と音楽Ⅱ（講義）…藤島義勝（教授）

自然と体育Ⅳ（実技）…中野偉夫（助教授）

8月31日

自然と体育Ⅴ（講義、実技）…一木昭男（教授）

Ⅵ（…）…

9月7日

自然と経済（講義）…石原孝一（教授）

シンポジウム…全講師

閉校式

9・受講料 1000円 講義資料、実習実技材料費を含める。

10・受講申込（…略…）

# 大田堯元学長の大学理念

たかし

地域交流研究センターとその活動を、都留文科大学の理念を問う一環として、ゆたかに構想していきたいと思えます。そのための資料として、大田堯元学長の文章の抜粋を掲載します。

大田堯「都留文科大学と都留市民」(1983年)より

- 一 小さな学園都市(…略…)
- 二 都留文科大学の生い立ち(…略…)
- 三 都留文科大学の問題と課題

(中略) たしかに都留文科大学は、小学校教員の養成をもつて一つの特色ある仕事を果たしては来たけれども、大学としての個性というより、ある種の社会的必要を満たすという仕事をしてきたということが正確である。けれどもそうした伝統、歴史の実績をもっていることは事実であり、この事実をふまえたうえで、これからの大学における学問、教育の質、(単に社会的必要の充足という観点だけからでなく)大学の本質にもとづく個性というものの創出が、いませまられていると考えられる。

それでは、この小都市の一公立大学としての都留文科大学の学問、教育の個性というものをどこに求めるべきであろうか。私見として、この課題についてふれてみた

い。都留文科大学は、しばしばまちがえられるが都留文化大学ではない。文科大学である。そうしてその文科の意味は humanities の訳語であって、ヨーロッパの源流はルネッサンスまで少なくともさかのぼることが出来る。この humanities という学問分野は、言語、哲学、文学、歴史などの研究を含む人間研究である。現在でも、フランスのリセーなどでは、教科目を包含する一教科分野となっている。つまり都留文科大学は都留人間研究大学なのである。現在の都留文科大学は四年制単科大学で、文学部の一学部構成になっている。学科は三つあって、初等教育学科、国文学科、英文学科からなっている。これらの学科はいずれもすべて人間研究のための学科ということができる。

英文学科は英語という言語と文学をとおしての人間研究であり、国文学科は日本語と日本の文学をとおしての人間研究である。さらに初等教育学科は人間の発達と諸文化(社会科学、自然科学、芸術、体育など)との関係を研究する学科である。もちろん現実の諸学科がそういう一つのトーンの中にきちんと位置づいているというのではない。英文学も国文学も大きな国立大学の英文学科、国文学科の縮小版的な傾向も強く、研究分担の領域もそういう旧来の学科を横しているところが少なくない。初

等教育学科も教員免許状との関係もあって、けっきょく従来の小学校教員養成課程の枠から抜け出してはいえないところがある。けれども、課題として考える場合、それらの学科が人間研究に収斂して、それぞれの学問領域を再編することの必要は、学問発展のための内在的要求でもあるのではあるまいか。学問研究の専門分化、細分化は、学問発展の必然的方向であるといえる半面、その細分化が発展を妨げている。そういう意味では、これらの学問がもう一度 humanities 人間研究という出発点に立ちかえって、現在の地位、役割を見返ることなしに、新しい一歩はふみ出しにくくなっているのではあるまいか。そういう学問発展の内在的要因にかかわって、都留文科大学の性格を考える必要があると思う。

だが、大学の性格、個性というものは、学問に内在する必要にもとづくとともに、社会の要求とのかかわりでも考えられなくてはならない。とくに、大学での教育は、社会的要求を無視してできるはずはない。都留文科大学は既述したとおり、全国から若ものたちが集まり、四年間をこの田舎町ですごして、再び又まちがいなく地域に帰っていく。このサイクルをたどる若ものたちは、中央の有名大学を出て、そこでまた中央にとどまって社会の階段を昇ろうとする若ものたちとは、たしかにちがうところがあるように思う。とにかく地域に帰って、地域の人びとに直接ふれあいながら仕事をする。その中の有力な一つが教師の仕事である。これらの都留文科大学が送り出す若ものたちは、過去の実績もふまえたうえで、教

師を中心とする地域の民衆の生活改善に直接に奉仕する質の高い専門家たるものが、もつともふさわしく思われる。教師のほかにも、保育者、図書館員、学芸員、地域の福祉センターなどで働くカウンセラー、などなど、できれば地域の病院と提携して保健婦などまで含めて考えたい。つまり一般民衆に直接接触しながら、その生活改善に貢献する第一線の専門家たることである。そうして、こうした人材が、ゆたかな人間研究の中から生まれ出ることは、ごく自然なことと思われる。それどころか、従来の日本の大学、とくに国立大学の学問が、とかく官房学、国家統治的な性格を帯びるといふ重い伝統とはことなつて、被治者民衆の生活改善、改革につながる人間研究は、日本の大学の学問と教育の質に新しい方向をもたらすのではないかと期待される。つまり日本の民衆や、できれば第三世界の人びとの生活改善に参加できる力量をもった人びとを育てる大学でありたい。

このようにして、人間研究を軸として、地域民衆の生活改善の専門家を育てることをめざす都留人間研究大学というイメージが、これまでの伝統をふまえたうえで今後の課題として構想される。

#### 四 地域に開かれた大学をめざして（…略…）

（天田『地域の中で教育を問う』新評論、1989年、所収）

## 見沼田んぼで 都留自然博物館と再会する

■ 安藤聡彦

今年の春から埼玉大学教育学部でひとつの新しい授業をスタートさせました。名づけて「見沼フィールド・スタディーズ」。いまや政令指定都市となった埼玉県さいたま市の中心部に「見沼田んぼ」と呼ばれる1260ヘクタールもの広大な田園地帯があるのですが、そこをフィールドとして、学年や専修の枠を越えて、学生たちが心と体と頭をフルに使って学び合う、そんな授業です。

この授業は、この見沼田んぼの間近で半世紀以上にわたって暮らしてこられた大田堯先生が「見沼田んぼの保全のための教育・研究のため」という目的で埼玉大学教育学部に寄付金を下さったことよって誕生させていただきました。その背後にある大田先生の「見沼フィールド・ミュージアム」構想については、すでに本誌16号 / 17号で先生ご自身がお話になっておられるとおりです。

今年の3月には、北垣憲仁先生が大田先生宅で私たちが開催している勉強会に来てくださり、「無限の可能性をとりこむフィールド・ミュージアム」というご報告をしてくださいました。その際先生は、1984年の都留文科科大学入学以来の「ムササビと森を守る会」等でのご活動や今泉吉晴先生の研究室での研究についてお話くださったのですが、私は大田先生が1983年に書かれた「私の都留自然博物

館」を手がかりに、私の恩師の藤岡貞彦先生とともに都留文科大をお訪ねし、今泉先生の研究室などを見学させていただいた覚えがあります（藤岡「も」に出会い、人に出会う」、『教育』1983年12月号）。それから四半世紀以上の時間を経て、まさか見沼田んぼで「都留自然博物館」と再会させていただけとは！

これを機会にぜひ都留の皆さんが育ててこられたものにあらためて学びつつ、さいたま市という大都市のど真ん中でフィールド・ミュージアムの実現に向けて歩みをすすめていきたいと願っております。

（あんどつ としひこ・埼玉大学教授）



## 「見沼フィールド・スタジアム(A)」 (2010年度前期)の内容

○第1回／5月29日(土) 10時から17時、場所・見沼自然公園

午前中ミミニ・オリエンテーリング  
午後乾燥化した湿地での水路掘りと講義「見沼学習への誘い」(石井秀樹氏／法政大学)

○第2回／6月5日(土) 10時から20時、場所・見沼たんぼ福祉農園  
終日農作業と自炊による食事

○第3回／6月26日(土) 10時から17時、場所・大崎農業者トレーニング・センター

講義「見沼たんぼの農業」  
(島田喜之氏／さいたま市農業委員会委員長)

講義「青年農業者として生きる」  
(岡田徹氏／美園いちごランド代表)

講義「見沼たんぼの保全と市民の力」  
(島田由美子氏／NPO法人見沼ファーム21理事長)

○第4回／7月17日(土) 10時から17時、場所・見沼自然公園

木の実幼稚園の卒業生の子どもたちと水路掘り、ザリガニを釣って料理をつくる、小屋作り、そのうえで一緒にご飯と片づけ  
最後に講義「見沼たんぼの生きものたち」(大武昭雄氏／元市内小学校教員)

## 「見沼フィールド・スタジアム(A)」に参加して

■手代木僚

たまたま教育学部A棟の貼り紙を見て参加した「見沼フィールド・スタジアム(A)」でしたが、全ての講義が終わって振り返ってみると、参加してよかったとつくづく思いました。講義を受ける前は、埼玉県に関する知識は北浦和駅と浦和駅を間違えるほど全く無く、埼玉県はビルばかりの都会だと思っていた。しかし、1回目の講義で初めて見沼に行ったときに、さいたま新都心とかをはじめて見沼に都会だと思っていた埼玉県にこのようなのどかな場所があったんだと非常に驚きました。

また、4回の講義を通して様々な形で見沼とかわっている方のお話を伺いましたが、どの方も共通して、見沼という土地を非常に大切に思っていて、中には反対運動などに参加される方もいました。見沼という土地を大切にされている方々がたくさんいるからこそ、都市開発が進められている埼玉県の内部にありながら、見沼の自然は残されているのだと実感しました。

しかし、見沼という土地が全て良いわけではなく、水害などが起きやすかったり、道路の問題があったりすることも学びました。見沼の良いところと悪いところの両方を知ること、さらに見沼と深くかかわっていくことが可能になると思いました。

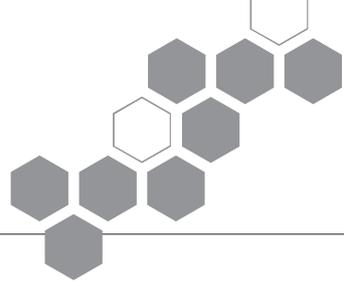
それから、みんなで食事をする機会が多々あつ

て、普段の生活では1人ぼっちでの食事なので、みんなでワイワイ話しながら食事をするのが出来るのは、とても良かったです。

「見沼フィールド・スタジアム(A)」は、必ずまとめの時間がありました。これがとても勉強になりました。私を含め、1年生の感想は、どうしても「××が楽しかった」とか「××からこういうことを学んだ」など、一つの事柄に対して一つの感想しか述べることが出来ませんが、3・4年生の先輩方の発表はたくさんの方の事柄から、それを農業などとは違った面とつなげたりした内容で、とても深く、勉強になりました。私も、物事を関連づけて話せるようになりたいと思いました。

埼玉県・埼玉大学教育学部学校教育教員養成課程  
社会専修1年





都留文科大学フィールド・ミュージアムが歴史を重ねてきていますが、他の地域でも市民が参加するフィールド・ミュージアム（と呼ぶべきもの）の実践が行なわれています。ここでは、そうした事例の一つとして、広く注目されてきた平塚市博物館学芸員の浜口哲一氏の実践を取り上げてみます。なお、平塚市博物館での都留文科大学フィールド・ミュージアムの展示について、本誌10号に記事があります。

浜口哲一著『放課後博物館へ―地域と市民を結ぶ博物館―』地人書館、2000年、より部分抜粋

●取り組んだタンポポ調査  
(前略)

この調査に参加した人は、自分の担当する地域の地図を受け取り、都合のよい時に、指定された地点を訪ねて、その付近でタンポポを探します。そして、種類や生えている量、環境などを記録するとともに、種類の判定の証拠として花を一つと熟した実を一つかみ封筒に入れて持ち帰ります。こうして得た情報を持ち寄って、一枚の地図の上に記入していきます。タンポポ調査はこんな方法で進められました。

(後略)

●ツバメからカエルへ

「みんなで調べよう」の行事は、その後毎年テーマを変えて、二十年來続けて実施されています。中でもツバメ、セミのぬけがら、カエルなどが全市民的なまとめができ、それなりの成果を生んだテーマでした。

1987年から89年にはカエルの調査に取り組む

ことにしました。平塚市は、神奈川県内では珍しく今でも広い水田地帯を持っており、水田が動物の生息環境として重要なことを示すのに、カエルはよい材料だと考えたのです。

(中略)

この調査では、参加者は約一平方キロの調査区を受け持ち、四月から六月の間に少なくとも二回、所定のコースを夜に歩き、鳴き声が聞こえたカエルの種類を地図上に記録するという方法をとりました。

調査結果の精度を高めるためには、参加者にカエルの声をしっかり覚えてもらわなければなりません。そのために、各年度に三〜四回の野外観察会を実施して、共通知識を増やしてきました。二年目には、タゴガエルやモリアオガエルという平塚には分布していない種類を訪ねる会も計画し、参加者にカエルという生きもの自体に興味を広げてもらえるような工夫もしてきました。

夜の水田を歩くという調査は、ふだんの生活ではめったにできない経験なので、参加者にも強い印象を残したようでした。記録用紙に加えたアンケートには、「夜の畦に一人で座っていると、非日常的な開放感があつて楽しかったです」「田の溝にはまつたり、クモに行く手を阻まれたりしたが、カエルとのデートを志したおかげで、多様な夜の自然を楽しむことができた」「谷戸の向こう岸にけもの気配を感じたり、ヘイケボタルが光るのを見たり、毎回心がときめきました」などの感想が寄せられました。

(後略)

\* 浜口氏は、残念ながら2010年に他界されました。



平塚市博物館



故浜口哲一氏 (いずれも平塚市博物館提供)

地域交流研究センターの思想を探究しつづけていくために、ソローの1854年の著作から抜粋し掲載します。

ヘンリー・D・ソロー著『ウォールデン―森の生活―』（今泉吉晴訳、小学館、2004年）

「第3章 読書」より（注記も取捨してあります）

もし、人が何のために生きるかを、もう少し考えて生きるなら、誰もが本當の観察者になり、研究者になるでしょう。人は楽しく生きようとする本性を持ち、楽しく生きることによって成長するよう、定められているからです。

（中略）

いったいどれほどの数の人が、本に親しむことを通じて人生を開いたでしょうか。本が、生きることの不思議を説き、新しい生き方を暗示しました。本はまた、私たちが言い表せずにいる何ごとかをはつきりと示してくれます。（\*）私たちが今、まごつき、悩む問題は、かつて本の書き手も同じようにまごつき、悩み、考えた問題でした。私たちが出会う問題で、かつて本の書き手が考えずに見過ごした問題は、ひとつとしてないでしょう。本の書き手は、それぞれに問題に立ち向かい、個性豊かな才能を駆使し、育て、それぞれの言葉と暮らし方で答えています。私たちは、本の書き手から、賢さばかりでなく、広い心も学びます。

（中略）

私たちの町は、児童のための初等教育だけは、少しはまともな教育の組織を用意しています。でも、私たち自身のための学舎はどうでしょうか。ほとんど消えそうな冬のライシーム運動の講演活動（\*\*）と、お金は出

さない州政府の提案のおかげで最近ようやく開館した小さな図書館を除くと、何もありません。私たちは、体に安楽なものとは病気には、やたらお金を使うのに、心に良きものにはお金をかけません。そのため、男も女も大人になりかかったら最後、教育の機会から離れます。となれば、今こそ私たちは、初等教育の学校ではない大人の学校を持つべきです。それには、村がそのまま大学になればいいのです。年長の村民は、みな大学構成員になり、余暇をその活動にあてます。人生のすべてを哲学の研究に捧げます。

これからの世界は、パリに大学がひとつ、オックスフォードにまたひとつ、でいいはずがありません。コンコードに学生を下宿させ、この町の空の下で哲学の研究に励んでもらしましょう。気鋭の哲学者アベラール（\*\*）を招いて、講義に耳を傾けようではありませんか。

（以下略）

（注）

\*ソローにとって優れた本は、表現の教科書『ウォールデン』は、アリステレスのセンス・オブ・ワンダー、カトリーの農業の楽しみ、アダム・スミスの経済の言葉、ゲーテの生き物の言葉、エマソンの本能の言葉、イーヴリンの森の言葉、そしてギルピンの雄大な景観描写の言葉で書かれている。

\*\*ライシームは、アメリカ各地でゆるやかな連携を持って展開された社会教育運動。講演を中心に、演劇、ダンス、音楽などが行なわれた。ソローはコンコード・ライシームで講演してこの本の着想を得た。

\*\*\*P・アベラール（1079～1142年）。フランスの神学者で哲学者。詩とエロイーズとの恋で知られる。

## ソローの「エコロジー」の

### 手紙にあるのでしょいか

大原興著『エコミュージアムへの旅』(\*)への疑問

■今泉吉晴

わたしは畑潤さんから、この7月に興味深い問い合わせを受けました。ヘンリー・D・ソローが「エコロジー」という言葉をはじめ使ったと書いている本を読んだが、ソローはどんなふうはこの言葉を使っているのか正確に知りたい、という問い合わせでした。

「エコロジー(生態学)」は、ドイツの進化論者、エルンスト・ヘッケルが1866年に初めて使った、とされます。ところが、横浜国立大学の建築学者、大原興氏の『エコミュージアムへの旅』(1999年)によると、「エコロジー」を最初に使ったのはソローということでした。具体的には、「エコロジー」はソローの1858年の手紙で使われました(同書の20〜21頁)。また大原氏は、同書の「エコロジー命名にかかわる年表」も、ソローを出発点にしています(23頁)。事実なら、ソローはヘッケルより8年はやく「エコロジー」を創案したことになります。

わたしも『エコミュージアムへの旅』を読んでみました。大原氏が「エコロジー」の創案者をソローとした根拠は、R・マッキントッシュの「生態学 概念と理論の歴史」(大串隆之他訳、1989年。原書は1986年)と、分かりました。同書を見ると、以下の記述がありました。

「後に誤りであることが明らかになったが、かつてエコロジーの命名者という栄誉が、科学者であるヘッケルから《牧歌的》自然観察者で詩人であり、哲学者でもあったヘンリー・ソローに移ったことがあった。このような見解は、すでに『サイエンス』誌で誤りであることが明らかにされていたにもかかわらず、同誌上でこのもつともらしい説がまたしても復活したのである(マッキントッシュ、1975年)。オクスフォード英語辞典(OED)でさえも、依然として生態学をソローの造語であるとしている。」

大原氏の引用とはあいれない記述です。あるいは大原氏は「同誌上でこのもつともらしい説がまたしても復活した」という部分と、「OEDでさえも、依然として生態学をソローの造語であるとしている」という部分を論拠にしたのでしょうか。

いずれにせよ、誰が「エコロジー」という言葉を使ったソローの手紙があるといい、それを誰がどんな根拠で否定したのか、それが問題です。そこでマッキントッシュが引用論文にあげている「サイエンス」誌の論文をみてみました。論文はスミソニアン研究所のR・エーシャーが書いたものです(Letters, vol.129, 1959)。

エーシャーはW・ハーディングが「The Correspondence of Henry David Thoreau(以下「Correspondence」と略記)」(1959)で、ソローが従兄弟にあてた手紙で「エコロジー」を使っている、と指摘して、それはヘッケルによる「エコロジー」の定義より早い、と主張しました。

ところが、ずっと後のハーディングの論文「Walden's Man of Science」(Virginia Quarterly Review, 1981)を見ると、ハーディングは「Correspondence」のソロー

の手紙に関する記述は誤りとし、撤回していました。つまり、最初にソローが「エコロジー」を使ったといったのはハーディングであり、それを否定したのもハーディングでした。

ハーディングのこの論文は、かなりボリュームがありますが、まずはソローの手紙をみましょう。手紙はソローが1858年に、メイン州バンガーにすむ従兄弟ジョージ・サッチャーにあてたもので、共通の友人エドワード・ホアーにふれて、こう書いています。

「Mr. Hoar is still in Concord, attending to Botany, Ecology, etc.」(ホアーはまだコンコードにおいて、植物学、ecology などなどに没頭しています。)

ハーディングは論文で、このソローの手紙の「植物学」につづく言葉を「エコロジー」ecologyと読んだのは間違いで、じつはgeology(地質学)だった、と撤回しています。1858年のソロー(1817~1862)は元気で、散歩にせいをだしていました。地質学は散歩で注目しているソローの関心事でした。

ハーディングがgeologyをecologyと誤読したのは、ソローが日記や他の手紙などでgeologyをどんなふう  
に筆記しているか、調べるのを怠ったからです。鉱山の開発がさかんだった当時、化石の研究にも貢献するgeologyは時代を先導する学問で、植物学とともにソローがよく使う言葉でした。

それに手紙でecologyに熱中しているのはホアーです。まだ知られていない学問ecologyにホアーが関心を向けるのは、あり得ない解釈です。でも誤りは誰にもありません。ハーディングは「Correspondence」の原稿を書き上

げる直前で忙しく、未発表のソローの手紙を読んで「エコロジー」と読み違えた。ねつ造ではない、恥ずかしい、とわびています。

ハーディングがねつ造を否定したのは、ハーバード大学のR・イートンから、手紙はねつ造ではないか、と詰問されていたからです。またハーディングは、ソローの「エコロジー」がOEDの1972年版に用例としてつたことから、編者に誤りを伝え、取り消しています。

ハーディングが1958年おかしうっかりミスをしたのは、長過ぎた感があります。けれど、1999年になって改めてハーディングの1958年の「エコロジー」を掘り起こした大原氏の主張はショッキングです。わたしは個別科学の弊害を多く詩人ソローが心変わりした、と誤解するところでした。

大原氏が根拠として示す文献をたどると、ハーディング自身が1958年のソローの手紙の「エコロジー」を否定する詳細な論文に到達するのです。どんな読み方があって大原氏はソローを「エコロジー」の創案者としたのか、波紋はどう広がっているのか、議論を喚起するため、知り得たことをまずはお伝えしました。

(いまいずみ よしはる)

(\*) 大原一興著『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会、1999年



## 「暮らしと仕事」部門の実践

生計を支える農業に接し、

視野が広がる

■山崎 瞳

地域交流研究センター「暮らしと仕事」部門では、地元で農業を営む方々から、農業に対する考え方や取り組み方、栽培方法などについて、お話をうかがう機会を持ち、「農のある暮らし」や農を活かした仕事のあり方について学んでいます。本年度も、その第一弾として、都留市大原で、農業を営む佐藤秀次さんをお訪ねすることとしました。農業に興味・関心を持ち、実践する学生も多くなっています。今回は、そうした学生たちが連携をしながら、一緒に学びの機会を共有しようということになりました。

学生の呼びかけ団体は、「Social菜園's Club」「農学部」「田んぼクラブ」「work-waku都留」「社学環コミ大豆プロジェクトチーム」です。

2010年5月30日(日)午前9時から11時半まで、じっくり畑の実地講義をいただきました。(編集部・田中夏子)



先日訪ねた佐藤ファームさんでは、『農業』としての畑作を学びました。それは、普段の『菜園』としてのサークル活動では学ぶことのできないものであったと思います。

具体的な例として、農業の重要性と必要性です。このお話を聞いたとき、私は農家であった祖父を思い出しました。今日では、自然農法や完全無農薬・有機肥料による有機栽培(有機野菜)が良いとブームになり、農業や化学肥料が倦厭される傾向にあるように感じます。

しかし、佐藤さんや祖父のように農業で生計を立てている方にとっては、農業というものも必要であるということです。私たちが安く大量に状態の良い野菜を購入できるのも、そのおかげなのだということとを思い出しました。農薬や化学肥料を「全く使用しない」ということばかりにこだわったり、とらわれたりせず、佐藤ファームさんのような減農薬栽培やあるいは農業そのものについても広く学び、視野を広げて見識を持つことも大切であり、それはまた、私たちに必要なことでもあると感じました。

(やまぎき ひとみ・初等教育学科3年)

細やかな工夫の数々に学ぶ

■三村隆仁

今回の佐藤ファームさんの勉強会で改めて農業の難しさを実感しました。その中でもビニールハウスの話が特に印象に残りました。私たちが所属しているサークル「農学部」では、無農薬で、ビニールハウスのような保護システムをしておらず、自分の職業としていないので多少の失敗も許される部分もあります。しかし、実際農業を職業とし、食べていけるだけの稼ぎを得るためには、右記のようなことを行わなければなりません。そのためには一棟一二〇万程もするビニールハウスを何棟も設置したり、そのビニールハウスも寿命があるので五年に一度ほどは七、八万もするビニールネットを取り付けたいといけません。

また、防虫ネットもしっかりと完備し、万全で野菜作りを行っています。それでもなお何らかの原因で野菜が病気になるったり、傷んだりし、売り物にならなくなってしまうことも少なくはありません。そのような状況の中でも、佐藤さんほか、農業に本気で従事している全ての人達は細かな管理体制の構築の下、休みなしの大変な経営を行っています。だから私たちもせっかく農業をやらせてもらっている中で、今回学んだことをしっかり今後に生かし、消費者に喜ばれるような作物を作っていきたいです。

(みむら たかひと・初等教育学科3年)

七月は、「農のある暮らし」学習会の第二弾として「オルタ農園」をお訪ねしました。オルタ農園の園主、萱場和雄（かやばかずお）さんは、都市部で生協の経営に携わっていらした方ですが、現在は、山梨県鳴沢村で、地域づくりを志向した農業をやっているらしいです。以前から鳴沢村内の耕作放棄地の活用や特産品開発の取り組みを、県内NPOや地域づくりに関心のある事業者さんをネットワークで結びつつ進めてきた萱場さんの、農業と地域づくりに学ぶというのが、今回のねらいです。（編集部・田中夏子）

## 畑を森にする

### 鳴沢村のオルタ農園を訪ねて

■内山 歩

富士山のふもとにある鳴沢村は、キャベツやトウモロコシの畑が広がっていた。軽トラックの後ろに腰掛けて、私たちを待っていていた萱場和雄（かやばかずお）さん。到着すると早速、畑を案内してくれた。

周りの畑とは対照的に、萱場さんの畑は小さいながらも、色とりどりの野菜が植えられていてにぎやかだ。八枚の畑で、なんと六八種類もの作物を育てている。畑はどこも一列ごとに違う種類の野菜が植えられていて、たとえばナスの列の隣には春菊があり、ナスに虫が来るのを防ぐ役目をしている。

「いちばん大事にしているのは多様性」という萱場さん。「人間社会も同じだよ。大企業ばかり生き

残るのはキケンだ」。

萱場さんは一株から一〇〇本のキュウリを採る名人。たくさん実をつけるための剪定を教わった。植物は本来、何もなくても自分で生きようとすると力を持っているもの。だから人はその力をどう手伝うか、なのだという。トマトのように実を食べる作物は、苗のうちに植え替えたりして、ちよつといじめてやる、すると危機感を覚えて苗は懸命に子孫を残そうとし、実をたくさんつける。葉や茎の生える角度で、健康状態がわかったりもする。そんな風に植物の状態を常に観察しているから、植物の生命力に合わせて、その時必要な手助けができるのだろう。畑を森にする、という意味が、少しずつ見えてくる。今の農業は野菜を土で育てるといふより、肥料で育てている、と萱場さんは言った。

土に肥料を撒くのではなく作物の根元に直接化学肥料を与え、それを吸って野菜が育つのだという。もはやそうなると、土の役目って何なのだろう、と考えてしまう。

一方、萱場さんは、土づくりを大事にしている、牛糞など有機肥料にこだわっている。面白かったのは、土のでき具合で、そこに生える雑草の形が変わってくるという話。畑を始めたころは、トゲがあるものやイネ科の雑草が多かった。しかし土のできてきた今、雑草は丸い葉ばかりになっている。そういうえば私がサークルで耕している畑はトゲの草ばかりなのだ。もつとじつくり、畑で遊んでみたくなった。

（つちやま あゆみ・社会学科現代社会専攻2年）



オルタ農園の園主 萱場和雄さん



畑から収穫したサラダゴボウをそのままかじる筆者



講演者 秋元由紀さん

地域交流研究センター「暮らしと仕事」部門では、例年、地域社会（海外含む）の課題やその解決に取り組む人々の活動をめぐって、現場に詳しい方々を講師にお招きして講演会を開催しています。昨年は、イラクの戦争民営化と出稼ぎ労働のお話しを、ジャーナリスト安田純平氏からいただきました。本年度も引き続き、地域にとっては切実な開発問題と紛争との関わりについて、秋元由紀さんをお招きし、講演会を開催。本講演会のコーディネートをしていただいた佐伯奈津子先生にレポートをいただきました。（編集部・田中夏子）

軍事政権を支えてきた日本

講演会「ビルマ(ミャンマー)の紛争と資源開発——天然ガス開発の事例から——」を開催して ◎講師 秋元由紀さん

■佐伯奈津子

仏教僧侶らによるデモへの弾圧（日本人ジャーナリストが射殺された）、サイクロン「ナルギス」による被害——ビルマの人びとは、軍事政権のもとで連綿と起る苦難のなかでの暮らしを強いられています。地域交流研究センターは五月一日、ビルマ情報ネットワーク (<http://www.burmainfo.org>) 代表の秋元由紀さんに、この激動するビルマ情勢と軍政を支えてきた資源開発についてお話しいただきました。

軍政は、天然ガス、木材、鉱物、宝石などの天然資源を資金源とし、その歳入は月一・三〜一・八億ドル、外貨準備高は数十億ドルにのびます。しかし、医療費は国内総生産（GDP）の実に〇・三％、教育費と合わせても一・四％しかつかわれていません。そのいっぽうで、ミグ戦闘機を数十機購入（一機一五億円）するなど、莫大な軍事費が積み込まれています。兵士の数は東南アジアで最多です。

軍政を支える資源開発の例として、サルウィン川における電源開発、ヤダナおよびイェタゲン天然ガス開発があります。どちらも少数民族が住み、軍政に対する抵抗運動が起きている地域です。そのため開発現場を軍が警備し、強制労働や強制移住などの人権侵害が発生しました（ヤダナ田開発にとまなう

人権侵害被害者は、権益をもつユノカルー現シエブロンを米国で提訴。秋元さんは、この裁判に原告弁護団として参加）。

この天然ガス開発には日本も関わっています。日本政府とJX日鉱日石開発（元新日本石油開発）が五〇％ずつ出資した日石ミャンマー石油開発が、イェタゲン田の権益の一九・三二％を有しているのです。しかし軍による警備や人権侵害について、政府は「承知していない」、新日石（当時）は「聞いていない」と、あたかも放置するかのようになっています。

ビルマでは一二月、二〇年ぶりに総選挙が実施される予定ですが、議席の四分の一を軍人が占め、ノーベル平和賞受賞者アウンサンスーチーさんの自宅軟禁がつづくなど、見せかけだけのものになることは、すでに自明の理となっています。日本が今後も、資源開発を通じて、軍政を容認し、資金的に支えていくのか—ビルマの民主化は日本の問題でもありません。

（ささき なつこ・都留文科大非常勤講師）



編集部注

本稿は10月に執筆をいただきました。本文にあるように11月に総選挙がおこなわれた結果、軍政与党が圧勝。またアウンサンスーチーさんは自宅軟禁から「解放」されたものの、その政治的活動の自由度はきわめて制約あるものとされています。

## つながるエコカフェの挑戦

■河野 格

陽が暮れるころ、キャンドルの灯りに誘われて、歩を進める。

時刻は17時30分。都留市エコハウス。

ライトアップされた入口には「つながるエコカフェ」の文字が浮かび上がる。

階段を上り、二階の一室に入ると、そこは夜のカフェ。

フライヤーやチラシ、書籍が陳列してある「環境情報コーナー」でじっくりと情報を手に取る人。

知らない人と挨拶し、自己紹介し合っている人。

ジャズが流れる雰囲気、ドリンク片手に堪能している人。

いろいろな人がいろいろな過ごし方をしている。一体この場で何が起ころのだろうか。

◆ エコカフェは大きく分けて4つの構成から成る。

一つ目は、「都留産食材の新しい料理の提案」を業しめることだ。環境フォーラムでは、地産地消の推進を活動の柱の一つにしており、この場において、都留産野菜、穀類を使用したお菓子または食事が味わえる。

二つ目は、都留や全国の環境に関する情報を揃えていることだ。主に都留の情報を中心に配置しており、「丸太の森クリーンセンター」や「(株)炭香」など、環境に関わる「事業者の情報」があるのが特徴だ。三つ目は、ゲストトークの時間だ。市民団体や行政、事業者(企業)などさまざまなアクターを招き、10

分間で、自団体、自社の取り組みや目指すところなどを語ってもらう。これまで、JAつる農産物直売所やハラグチファーム、都留市学校給食センター、パルシステム山梨などの方々に語ってもらう。

四つ目は、日本と世界の環境に配慮した取り組み事例から、都留で実現可能な取り組みを探る時間を設けていることだ。さまざまな事例に触発され、具体的に主体的なアクションを市民が生み出すきっかけを作るのが狙いだ。

◆ つながるエコカフェは毎月第三土曜日の18時より、都留市エコハウスにて定期開催している。

6月からスタートし、都留の市民力と環境対応力の更なる向上を目指している。

市民と市民が出逢いつながることで、新たな何かが生まれる可能性があるのではないか。

環境情報の発信や交換をすることで、身近な環境改善行動につながるのではないか。

そんな期待を抱いている。

(この) いたる・都留市地域おこし協力隊  
NPO 法人都留環境フォーラム





## 地域の子育て・教育の共同

◆平成22年度(第13回)山梨県南都留地域教育フォーラムが開催されました

テーマ…子どもたちの教育は地域全体で担う

～みんなで育む地域連帯・地域交流～

日時…10月28日(木) 13時30分～16時50分

会場…富士吉田市立下吉田第二小学

全体会に続いて、七つの分科会に分かれて実践報告と討論が行なわれました。都留文科大からは、吉住典子、杉本光司、佐藤隆、田中夏子、西本勝美、筒井潤子の6名の教員が助言者として参加しました。本年度は、初めて本学学生2名(鷲野紗知さん、川国文学科、菊池晃成さん、社会学科)も報告者として参加しました。

### 南都留地域教育フォーラムに

#### 参加して

■井上和美

「子どもたちの教育は地域全体で担う」というテーマで開催されたフォーラムには南都留地区の多くの団体から大勢の方々が参加し行われました。地域の子どもたちを健やかに育てたいという思いが伝わり大変うれしくなりました。

初めに行われた全体会では、下吉田第二小学校の児童たちと卒業生による金管バンドクラブの演奏が

行われました。微笑ましく見つめていましたが、次第に感心が変わってきました。それぞれが自分の役割を果たしてのすばらしい演奏、きらりと光る実力、積み重ねられた練習が生んだ賜物なのでしょう。

引き続き行われた分科会では7つの部会に分かれ発表や意見交換などが行われました。私が参加したのは第七分科会「子どもたちを守るために今できること」です。産婦人科医の羽田先生から、今の子どもたちの性の現状や問題点などのお話を頂きました。想像よりはるかにショックな内容と、都会の事ではなく私たちが住んでいるこの地域でも、多くの問題点や性の低年齢化が進んでいることに驚きました。参加の皆さんからは、性教育は必要か否か、また、道徳的な教育か問題点に対応できる具体的な教育にすべきかなど、それぞれの思いを聞き、考えさせられました。なかなか口に出しにくいテーマですが、子どもと話し合わなければならぬ必要不可欠なことであることは間違いありません。具体的にどう話すかまではまだ判りませんが、折にふれ話題にしていくように思っています。

最後にお聞きした助言者の筒井先生のお話の中に自分は大切にされているんだと感じることは子どもにとって、とても大切なことという言葉がありました。それは性教育というだけでなく、すべての問題



に通じる重要なキーワードだと感じました。

多くのことを考えさせられたフォーラムでしたが、分科会のテーマのように知識から今できる行動に移していきたい思います。

(いのうえ かずみ・都留市立下吉田第二中学校PTA会長)

## 都留市子ども教室事業を紹介します。

都留市では、市内四つの小学校区（東桂、谷二、宝旭）を拠点として「子ども教室」事業を推進しています。この事業は、文部科学省の事業を発展的に引き継いでおり、最近では、県下の多くの類似事業が廃止となる中で、都留市が独自に発展させたもので、その活動の広がりと充実ぶりは県下でも高く評価されています。

本学の学生には学生指導員としての協力・活動が期待されており、たくさんの方が、地域の人々とともに、多くの活動に参加しています。学生指導員の活動の中心は「遊び」と「読書と学習支援」です。教職志望者の多い本学にとっては、三年次から始まる教育実習やS・A・Tとは、ひと味違った、気軽に日常的に子どもたちと触れ合うことができる二年次向きの活動として定着しています。（杉本光司）

## 子どもたちがいきいきできる場所

■長谷川緑

私はいくつかの子ども教室に参加させていただきましたが、その中でも「ものづくり」の活動に多く参加でき、そこでいろいろなことを感じました。

ものづくりにはフレーム作りやビーズ、押花などいろいろな活動がありました。その活動は、地域の方が先生となって子どもたちとともに製作をするというものでした。私は、悩んでいる子どもたちにア

ドバイスをしたり難しいところを手助けしたりしながら、一緒に作品を仕上げました。子どもたちが真剣に、そして自分なりに工夫しながら取り組む姿がとても印象的でした。さらに「これはお母さんにあげるからお母さんの好きな色にしよう」など、誰かを想いながら取り組む子が多く見られたのにはとても感動しました。

地域と学校の連携によって成り立っているこの子ども教室は、子どもたち同士が刺激し合い、協力し合いながらいきいきと活動できる素晴らしい環境だと思えました。

（はせがわ みどり・初等教育学科4年）

## 子ども教室に参加して

■高橋望

先日子ども教室に初めて参加しました。小学生とふれあう機会はほとんどないので、非常に新鮮でした。

地域の方をお呼びして、児童たちと一緒に押し花体験をしました。児童たちは先生に積極的に質問をして、思い思いに作品を上げていました。

児童の表現は私たちには想像できない斬新なものが多く、この感性を大切に育てていきたいと思いました。

地域と共に育つために、この教室は貴重な時間になっていると思いました。

（たかはし のぞみ・国文学科3年）



## 市内小中学校の公式ホームページの作成・運用支援について

■ 杉本光司

昨年度から、情報ゼミの受講生と情報センター職員による、市内小中学校の公式ホームページの作成及び運用支援がスタートしたばかりです。

都留市には小学校8校、中学校3校がありますが、この取組みの開始時には、ホームページの無い学校

(小学校…2、中学校…1)、ホームページはあるものの、ここ数年から最近までの間、一度も更新されていない学校(小学校…5、中学校…1)という状況で、随時の更新を行ってホームページの管理・運用を行っている学校は、小学校1校、中学校1校という状況でした。このことは以前から市内小中学校の情報教育担当者で構成されている、「都留市情報教育研究会」においても、度々検討されてきました。そこで、「市内小中学校統一仕様によるホームページの作成と運用」に対する提案を行ってきました。

まず、学校によってまちまちであるホームページの作成・管理様式の統一化を図ることにより、市内小中学校間の人事異動における混乱を避けることを前提にしました。更に、これまでは技術をもった人

に任せきりであった作業を、多くの人がコンテンツ作成に関わり、効率的な作業分担をすることができるとシステム作りを行いました。

当初は、大学情報センターと「情報メディア演習Ⅰ・Ⅱ」の受講生が支援することにより、新たな情報教育手段及び地域貢献の実現に向けて、新システムでのホームページ支援をすることにしました。定型的なサイトを作成することで、地域の小中学校が提供する公開情報のレベルの引き上げおよび底上げをすることを目標としました。

現在では、中学校1校を除く、小中学校10校のホームページが立ち上がりましたが、日常的な更新作業は、なかなか計画通りには進まず、今後、学生や大職員がどのように関わっていくべきかを含め新しい手法を研究中です。

一例として「附属小学校」と「宝小学校」の新しいホームページを示します。

(すぎもと てるじ・地域交流研究センター長)



◆平成22年度都留文科大現職教員教育講座（主催：地域交流研究センター）が開催されました。

（平成22年7月28日～7月29日 2101教室及び音楽棟M1講義室）

講座内容と講師は次のとおりです。

「講座の趣旨について」杉本光司（地域交流研究センター長） 「学力とは何か」田中昌弥（本学教授） 「子ども理解と学習指導」山崎隆夫（本学非常勤講師） 「教科に関する研究講座Ⅰ」清水雅彦（本学教授） 「教科に関する研究講座Ⅱ」滝井章（国学院大 学教授）

## 一挙両得!? 現職教員教育講座

■板垣尚子

娘が文大にお世話になって三年。以来HPのチェックを怠らない私は、ある日「平成20年度現職教員教育講座」の案内を見つけました。

当時、指導要領の改訂で、現場は混乱中でした。ゆとりをなくした新学習指導要領。少しでも新しい情報が欲しいと思っていた私は、すぐに申し込みをして「PISA調査の結果に対する対応」や「読解力」の大切さなど、田舎の教育現場ではまだまだ十分浸透していなかった考え方を学び、復命書に代えておこがましくも校内伝達講習までしてしまいました。

残念ながら校内行事の関係で昨年度は参加できなかったのですが、今年度は校長をはじめとする同僚の協力体制により、テスト中の娘には嫌がられながらも（笑）、受講することができました。鶯が鳴き、

紫陽花が残る、涼しく美しいキャンパスで、○十年前の学生生活に戻った気分…。

田中昌弥先生からは、「科学的な考えを持ち、様々な問題に自ら進んで関われる子どもを育てる」ことを教えていただき、山崎隆夫先生のお話は本当に温かく、私も先生の絵を額に入れたいと思いました。

また二日目の滝井章先生には、算数の時間、今まで時間の不足を理由にあまりできていなかった、子どもたちに実際に操作させることの大切さや、無条件に信用してしまっていた市販のテストが、実は点が取れるように作られていることを教えていただいで、愕然としました。

そして、私は普段音楽科に関わるが多いため、一番楽しみにしていた全国レベルの合唱指導者でもいらつしやる清水雅彦先生の講義。

三歳児からミドルエイジまで、幅広く指導してこられた実践に基づく理論は、まさに明日の授業からすぐに使える技の連続で、音楽棟での二時間は、あっという間に終わってしまいました。

都留文科大での現職教員教育講座は、他県の先生方や十年次研修の若い先生方と交流ができ、新しい教育に関する知識も学べ、旅ができて娘にも会える、私にとっては一挙両得ならぬ三得も四得もある素晴らしい講座です。来年度からも学校行事の合間を縫って、一日だけでも参加させていたかどうか考えています。よろしくお願ひします。

（蛇足ながら）猛暑の今夏、「つるの水物語 水水合格」をいただいて、心ものども潤いました。

（いたがきひさこ・徳島県阿波市立伊沢小学校教諭）



## 第1回及び2回公開講座 「教師力スキルアップ講座」の報告

■ 品田笑子

地域教育相談室では、今年度は教師が学級経営で必要な知識や技能をテーマに「教師力スキルアップ講座」としてシリーズ化し、研修会を開催しています。

5月22日(土)の第1回は構成的グループエンカウンター、10月16日(土)の第2回は「カウンセリングの基本スキル」がテーマでした。どちらも前半は理論編で講義、後半は実習形式で行われ、参加者は現職教員と学生でした。感想を見ると教師として現場で展開する際の参考になるとともに、学生や現職教員など様々な参加者の交流の場にもなったようです。以下に参加者の感想の一部を紹介します。

第1回…「人間づくりに活用するエンカウンター講座」の感想

・構成的グループエンカウンターの理論、アレンジの仕方、インスタレーションなど自分でやるときの参考になりました。「私のじゃがいも」「お絵かきしりとり」がとても楽しかったです。(20代小学校教員)

・本を読んだだけではよく分からなかった構成的と言う意味やエンカウンターとゲームの違いなどが、体験や講義を通して分かったような気がします。また、学生さんや色々な立場の人との交流でより今日のエンカウンターが生きたようです。(40代小学校教員)

第2回…「教育現場で活用するカウンセリングの基本スキル講座」の感想

・傾聴の技法について具体的に体験することができ、とても内容の濃い講座でした。問題の核心に迫る質問や自分自身に気づかせるようなカウンセリングにはまだ自信がありませんが、意識してこの技法を使ってみたいと思います。(40代中学校教員)

・初めての受講でしたが実習形式で楽しみながら学べ、明日から使える実践的な内容で勉強になりました。受容はできてもどう質問すればよいのか疑問でした。今日の講座を参考に実践していきたいと思います。(20代小学校教員)

(しなだ しょうこ・地域交流研究センター特任教授  
 地域教育相談室担当)



## 多元的社会のあり方 ～国内外の事例を通して学ぶ～

■重富恵子

去る10月1日から22日まで、大学コンソーシアムやまなし主催、本学地域交流研究センター共催の「県民コミュニティーカレッジ講座」が本学図書館学習室で4回にわたって開催されました。今年は比較文化学科が担当し、総合テーマを「多元的社会のあり方」といたしました。多文化状況を静態的ではなく動態的に把握する狙いから、「多元的」という表現を用いました。

第一回目、重富が担当した「オーストラリアとオリーブの多文化状況と取り組み」では、人の移動の世界的傾向を示し、多文化社会形成過程のモデルを説明しました。第二回目、内山史子専任講師による「フィリピンの多文化状況と言語事情」では、多様な民族、文化集団から構成されるフィリピンにおいて、母語、地域言語、国語、公用語、教育言語とそれぞれ異なる言語を操りながら国家社会が形成されていること、さらに自然発生的に拡大する共通語について報告がされました。第三回目、山本芳美准教授による「台湾の少数民族と文化を守る取り組み」では、台湾語の他200言語を有す台湾社会が、国語であった北京語を華語と位置づけなおし、他言語と同列に扱う方針に転じるとともに、母語を守る取り組みに力をいれ、少数民族メディアも誕生していることが紹介されました。最終回、家上幸子非常勤

講師による「外国ルーツの子どもたちの取り組みと支援」では、日常として二つの世界を往復している外国ルーツの子どもたちが、学校の中で周边的位置に置かれていることが紹介され、また子どもたちが置かれる困難な状況の根底には、日本社会の権力構造の中での、「外国人」定義枠組み自体に問題があることが指摘されました。

国際化が進む今日、私たちが直面している多文化社会の構築という課題について考える手掛りを提示できたのではないかと思います。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

(しげとみ けいこ・比較文化学科教員)



# 「いわむらかずお 絵本の丘美術館」 での実習

環境・コミュニティ創造専攻では、3年生になると、学生が自ら研修先を開拓し、一週間の実習「フィールド・インターンシップ」をおこなうこととなります。遠藤淑（えんどうしゆく）さんがたどり着いた研修先は、「いわむらかずお絵本の丘美術館」。本誌17号に紹介され、以来、本学ともおつきあいをさせていただいている美術館で、学生も大変多くのことを吸収させていただくことができました。（編集部・田中夏子）

## 「外と内」の循環を学ぶ

■遠藤 淑

私は「いわむらかずお絵本の丘美術館」という場所のでフィールドインターンシップの体験をさせていただいた。五日間という短い間であったが、多くのことを学ぶことができた。

とくに勉強になったことは、「外と内」の循環である。外というのは美術館を通じての来館者とスタッフのつながりや、来館者同士のつながりである。最終日に、昆虫採集のイベントにも参加させていただいたため、外の循環を強く意識して見る事ができた。内というのは、来館者に美術館の持つ全ての要素を提供するために行われている美術館内の清掃や整備、スタッフ同士のコミュニケーションなどである。この外と内の循環が、いわむらかずお絵本の丘美術館を魅力的な場所に行っている要素となっていることを学んだ。

実習を通して一番悩んだことは、この場所の雰囲気自分に近づくことである。この美術館では、来館者の方は「お客様」というよりは「お客さん」というイメージ。気軽に世間話ができるような雰囲気だった。その雰囲気慣れるまでに時間がかかったが、スタッフさんの、来館者を「家族のように」思うことというアドバイスを意識することで、完全とはいかなかったかもしれないが解決できたように思う。

学習上の課題として、宣伝ツールと、その浸透について、深く学ぶ必要性を感じた。この自然に囲まれた素晴らしい絵本の丘を、どうしたら多くの方に知っていただくことができるのか、すでに絵本の丘に魅せられたリピーターの方たちもたくさんいるようだったが、もっと多くの方に知っていただく方法にはどのようなものがあるのかを学んでいきたい。宣伝ツールとしてインターネットがあげられるが、それらが浸透していない地域にどうアプローチをかけるか、ということが課題として残った。

（えんどう しゆく・社会学科環境コミュニティ創造専攻3年）



美術館でのイベントを手伝う著者



本誌の16号（2009年12月発行）が、『月刊社会教育』（国土社、2010年4月号）の「資料棚」というコーナーで紹介されました。

地域交流研究センターに、本年度から事務職員が配属されました。

### 地域交流研究センターで働いて

■ 志村夏樹

都留文科大学地域交流研究センターで働き始めて半年が過ぎました。もともとは都留文科大学社会科学の学生だったため、地域交流センター通信はなんども目にしていましたが、まさか自分が編集に携わることになるとは思いませんでした。普段はコミュニケーションホール地下の地域交流研究センター事務局で働いており、ムササビライブカメラのメンテナンスや学内イベントの運営補助などを行っています。

（しむら なつき・地域交流研究センター職員）





## 編集後記

○巻頭の今泉吉晴氏の「リスにクルミの実をかえす」は、写真とともに、読者を森の現場に誘ってくれます。野生のリスを森の小屋から観察する試みですが、そこではリスたちは個性的な存在として観察されています。この巻頭文を読むと、シートン動物記について、その内部から理解できるように感じられてきます。

○私たちのキャンパスでも、リスを招くためにクルミの苗を植樹しました。多くの方に「キャンパスにリスを呼ぶ会」に入っていただき、みんなで樹木の成長を見守りながら7～8年先を夢見ることにしましょう。(8頁)

○2003年に地域交流研究センターがスタートし8年が経過しました。9年を想定したフィールド・ミュージアムの「研究計画」を総括し、あたらしい研究計画を構想するときがきました。予定した事業の前進とともに、予想を超えた意義深い交流の展開もさまざまにあります。(特集1 4～21頁)

○17号でお伝えした「大哺乳類展」(上野の国立科学博物館)ですが、入場者は33万人を超えたということです。北垣憲仁氏の館内講演での講演とギャラリー・トーク、また本学学生・院生による展示解説もたいへん好評でした。私たちの日常の事業は小規模ですが、メッセージ性をもっていることの証しだと思います。ささやかな実践がもつ普遍性について、これからも意見交換しながら考え合っていきたいと

思います。(20～21頁)

○私たち自身が大学の理念を問い直し、学問論・教育論を鋭くゆたかにしていくこと。そして、そのことと関連をもつものとして地域交流研究センターの諸事業を考えていくこと。特集2は、このテーマに多面的にアプローチしようと考えました。(22～31頁)

○下泉重吉学長のときに今日の「公開講座」と「現職教育講座」が始まっているということです。このような事実も、地域交流研究センターの成り立ちを歴史的に考えることを促します。『都留文科大学創立五十年記念誌』には、こうした各種講座の開設は、「大学対市という対決の構図、市民とはほとんど接点のない別世界、紛争が続く大学というものから、地域の大学へと変わって」いく意味をもったようだ、と記されています。(23頁)

○見沼フィールド・ミュージアムを担う安藤聡彦氏(埼玉大学教授)が、藤岡貞彦氏(一橋大学名誉教授)とともに、27年前に今泉研究室を訪問されていたことを知りました(26頁)。動物学者であった下泉学長は山梨県の自然保護教育に力を注がれていたようですが、安藤氏、藤岡氏は環境教育の研究をリードし続けておられます。

○次号は、「学生ボランティア活動の展開」と「農と山林に向かう」の二つを特集する予定です。

(編集長・畑潤)